
玉封師-Gyoku-fu-shi-

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玉封師 - Gyoku - fu - shi -

【Nコード】

N2925B

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

玉に悪鬼を封じ込める術者：玉封師^{ぎょくふうし}の帝太郎と、彼に従う玉封じの鬼：玉郎^{ぎょん}。託児所^{たくにしょ}を営みながら玉封師の仕事をこなす帝太郎の前に現れたのは二十数年前に妹を奪った鬼女だった――。

序

存外簡単に手折れた事に、女は呆けた様子で手元を眺める。

先程まで烏が鳴くような、猫が鳴くような、何とも五月蠅い音が聞こえていたはずなのに、今は嘘のようにしん……と静まり返っている。

二月二日にみんなですえた、臍の灸が効かなかったのは何故だろう？

毎月一日には必ず服用していた朔日丸なる薬もいかさまだった……。

出来てしまってから試したけれど、鬼灯も効きやしなかったし……。

水銀は……怖くて飲めなかったねえ……。

でもさ、大丈夫……。

ほら、この通り証拠は隠滅出来たじゃないか……。

空には朧に霞んだ下弦の月。
冬の立ち枯れた木々の伸ばす枝が、人間の骨ばった手の如き影を広げて頼りない月光を遮る。

そんな、闇に融け掛けた空間の中で、女がにい……と晒う、その赤い口元だけが妙にはつきりと浮かび上がった。

昼の明かりの下で見たならば、さぞかし妖艶な笑みであっただろう。

美しい女であるが故に、そのどこか狂気に満ちた表情が一層不気味に見える。

白い襦袢をどす黒い朱に染めて月を見上げる女の手には、今まさに生み落とされたばかりの赤子が握られていた。

片手を女に持たれ、人形のようにゆらゆらと揺れるその乳飲み子

は、首をあらぬ方向にだらりと折れ曲がらせて、虚ろな面差しで母を見上げる。

赤子の腹には、まだ臍の緒がぶら下がっていた。

“遊びをせんとや生れけむ

戯れせんとや生れけん

遊ぶ子供の声聞けば

我が身さへこそゆるがるれ”

女はそう呟きながら、カラカラと晒う。

ひとしきり晒ってから、思い出したように、今、己の手でくびり殺したばかりの赤子を愛しそうに抱きしめる。そうしてそのまま闇の中をふらりふらりと彷徨い始めた――。

遊ぶ子供ノ声聞ケバ

我が身サヘコソユルガルレ――。

六畳一間のおんぼろアパートに射し恵む清々しい朝日。

カーテンの隙間を縫うように、一条の光が部屋を分断している。

こたつの上の包みを照らした陽光は、そのまま突き当たりの壁に貼り付けられた沢山の写真へと伸びゆく。

飾られているのは、今にもそこから被写体の笑いさんざめく声が聞こえてきそうな、そんな写真ばかり。

驚いた事にそれらのどれにも幼児達にほぼ同化した雰囲気で短髪の男が一人。砂場遊びの場面にも、滑り台ではしゃぐ構図にも。時には幼子達同様泥まみれになっていたり、または画面のほんの隅っこの方で彼らを見守る、穏やかな笑みを湛えた保護者だったり。

「帝太郎、俺が茶碗洗つてる間にカーテン開けとけって言わなかったか？」

朝の光を目一杯室内に取り入れながら、長身の男が問いかける。

「……ごめん。忘れてた……」

彼には帝太郎から返ってくる言葉が予め分かっていたのか、それ以上は追及せず、代わりに小さく溜め息をひとつ。

それから窓を背に振り返ると、ふと目を細めてこたつの上を見遣る。

「……ところでお前、弁当忘れてねえか？」

「あ」

丁度靴を履いたところで投げかけられた声に、いけない、いけないと繰り返しながら四つん這いで畳の上を移動する帝太郎。

スーツにネクタイというフォーマルスタイルなのに、スラックスの膝の部分が擦れて光ってしまうとか、そういう事には全く頓着しないタイプらしい。

玄関先には黒のロングコートが無造作に投げ出されていた。丈の長いそれを羽織る前だったのは幸いだったかも知れない。

どうやら壁の写真に写っている人物は帝太郎のようだ。

「靴脱げ！ 誰が掃除すると思つてんだ！？」

「玉ちゃん」

そう言つてこたつの上の弁当をくわえると、いざるように後退を始める帝太郎。

いつもこんな風に彼の膝にこすられているからか、畳はあちこちが擦り切れて部屋の古くささに拍車をかけている。

スーツ姿でばつちり決めている風なのに、所々寝癖がついたままの髪。四つん這いになったせいで、ネクタイも少し曲がつている。

帝太郎を見ると、身の回りに春風をまとっているような、のほほんとした印象を受ける。整つた顔をしているくせにどこか憎めない、眠たげな瞳のせいだろう。

「……玉郎！ 名付け親だからつてコロコロ呼び方変えんな」

玉郎と名乗つた男は、言うが早いか大腿で帝太郎のところまで歩み寄ると、彼の襟首を荒々しく掴んで子猫でも扱うように眼前へ引き上げた。

その動きにあわせたように、一八〇センチ近い長身の背を、艶やかな銀髪が滑り落ちる。

和の出で立ちにエプロンというどこかアンバランスな組合せで、無言のまま帝太郎を睨め付ける。

和装なら割烹着だろ？と言いたいところだが、そんな事を言わせない迫力が、今の彼にはあつた。

乱れた髪が顔にかかるのもお構いなしで帝太郎を見据える。

玉郎に比べれば、帝太郎の身長は五センチばかり低いのだが、それにしたつて体重は優に六〇キロを超えている。その彼を易々（やすやす）と——しかも片手で——自らの目の高さまで引き上げられる玉郎の臂力たるや相当なものだ。ある意味人間離れしている。

着物——長着——の袂は家事の邪魔にならないようたすき掛けにされているので、力の込められた腕には女なら誰もが縋り付きたくなくなるような、均整の取れた逞しい筋肉が見て取れる。

この男、ぱつと見は決してマッチョ系ではないので、案外着痩せするタイプなのかも知れない。

玉郎にあんまり突然持ち上げられたので、思わずくわえた弁当包みを放してしまった帝太郎である。

床に転がった弁当も気になるが、それよりも息苦しさが勝る。喉を締め付ける襟えりに手をやると、喘鳴ぜんめい混じりの掠かすれ声で

「玉ちゃんつでは心狭あゝい」

それでも間延びした口調でそう抗議出来たのだから大したものだ。

「……玉郎！」

低く抑えた声音で念を押すようにそう告げると、玉郎は不意に手を放した。

親猫に運ばれる子猫よろしく完全にその身を玉郎に任せる形になっていた帝太郎の足は、着地と同時に呆気なくくず折れる。それで畳にお尻をしこたま打ち付ける格好になってしまった。

「……っ！　いつてえゝ！」

呼吸が楽になったのと入れ替わりで走った激痛に、帝太郎はしばらくその場でうずくまるようにして体を震わせる。

土足のままふらつきつつ立ち上がると、お尻をさすりながら玉郎へ非難の目を向けた。相当痛いのだろっ。目じりには薄ら涙がにじんでいる。

「土足姿で俺様に説教する気かい、帝太郎ちゃん？」

ニタリと微笑わらった玉郎の口元に覗くものは紛れもなく牙だ。断じて八重歯やえはなどではない。その証拠に、件の牙くだんの、何と鋭く長い事か。

加えて頭部、銀髪の間から見えつ隠れつしながら覗いているのは二本の角ではないか。

「玉封じの鬼は元来玉封師がんらいぎよくふうしに仕えるモンだ。それを女っ気が全くねえお前のために主夫しゆふまがいの事までしてやってるっつーの。お前、今晚はメシ抜きな」

「そんなあ！」

玉郎のセリフに、帝太郎は慌てて靴を脱ぎ捨てると、両の手にそ

れを履くような格好をしてみせる。

「ほら、この通り！　ね？」

降参こうさんのポーズ。

腰が少し引けているような気がするが、臀部でんぶのダメージを思えば無理もあるまい。

およそ三十二の男の取る態度とは思えないが、彼のこんな言動は日常茶飯事。

この、一、二本ネジの緩んだような春風駘蕩しゅんぷうたいとうとした雰囲気、玉郎には耐え難く感じられてしまう。

二呼吸分は優に超える大きな溜め息をつくと、

「ほら、ネクタイ曲がってんぞ。それに寝癖……」

新妻にいづまさながらの氣遣いでそれらを直してやる。

「ありがとう」

対する帝太郎の自然な様子から察するに、二人の間でこんな事は特筆に値しないようだ。

玉郎に身支度みじたくを整えてもらうと、帝太郎は両手に履かせた靴を左手に持ち替え、空いた手で弁当を拾い上げようと屈かがんだ。……とそこで顔をしかめて動きが止まる。どうも腰を曲げると打ちつけた箇所が痛むらしい。

その感覚から逃れるように背筋を伸ばすと、恨めしそうに包みを見つめる。

「玉ちゃん、弁当拾って？　お尻痛い……」

眉根を寄せて弁当を指差してから、思い出したように腕時計に視線を落とす。

「……っと、そろそろ出かけなきゃ。早く行かなきゃ今日もまた遅刻しちゃう」

出掛けに色々あったので、いつもよりも出発が遅くなったみたいだ。

胸の辺りをポンポンと叩きながら上目遣いに玉郎を見遣る。

「俺さー、そんな窮屈きゅうくつで嫌いなんだよ。なあ、どうしても入んねえ

とダメ？」

帝太郎に請^こわれるまま、弁当を拾い上げながら、玉郎が心底嫌^{きら}うにそう吐き捨てる。

「もちろん！」

そんな彼に容赦^{ようしや}なく頷^{うなず}いてみせると、帝太郎は首に下げたお守り大の赤い巾着袋^{きんちゃくぶくろ}から、丸いものを取り出した。

それは丁度ビー玉ぐらいの大きさをした一つの玉で――。

色は一言では表現し難い。

光の加減によって青にも赤にも……いや、その他のありとあらゆる様々な色に変化を重ねる、一時として同じ様相^{ようそう}を呈^{てい}さない不思議な球体。

少々語弊^{ごへい}がありそうだが、「虹色^{にじいろ}の玉」と称するのが最も妥当^{たとう}な線ではなからうか。

「玉封じの鬼^{あまじ}って普通主人^{ふつしゅじん}が呼び出さない限りはこの中に居るモンなんだよね？」玉ちゃん、さっきの口振りからするとマトモなお役目に戻りたそうだったらしい――」

殊更^{いっせう}「マトモ」という件^{くだり}を強調してニヤリと微笑^{わら}う。

先刻玉郎が告げた言葉を逆手^{さかて}にとって、してやったりと言わんばかりの表情だ。

「それにさ、玉ちゃんがそのまんまだとバス料金、二人分取られちゃうんだもん」

「……ほざけ」

不満たらたらな玉郎ではあるが、今日はとあるイベントの事もあるし、大人しくしておいた方が無難^{ぶなん}かな？と考える。

「初めて来る子達はどんな感じかなあ――」

溜め息をつく玉郎とは対照的に、まるで恋人の事にでも思いを馳^はせるかのように夢見心地な面貌^{めいぼう}で呟^{つぶや}く帝太郎。

二人の視線は自然と壁の写真へ向いていた。

「玉ちゃん、今日もカメラマンよろしくね――」

帝太郎、実はこの近くの建物をテナントとして借り受け、託児所

を開設していたりする。

仕事柄、カメラは必須アイテムだ。

経営者たる帝太郎にとっては、言わば毎日が子供パラダイス。趣味と実益を兼ねた職業とはよく言ったもので。

「……ロリコン……」

いつになく感情のこもった帝太郎のにやけ振りに、思わず口の滑ってしまった玉郎である。

聞こえるか聞こえないかの声音で一言報復すると、その姿は瞬く間に霧のように霞んでしまった。そうして、逃げるように帝太郎の持つ玉へと吸い込まれていく。

残された帝太郎は口を「へ」の字にして、手にした先刻の玉と、今まで玉郎が居た辺りとを交互に見比べた。

見詰める床の上にはご丁寧^{ていねい}に、先ほど玉郎に取り上げてもらったはずの弁当が鎮座^{ちんざ}している。

消える寸前、玉郎がわざと弁当から手を放したで（・）あ（・）ろ（・）う（・）事を、帝太郎は知っている。分かるからこそ腹が立つ。

不満げに立ち尽くす帝太郎に、

『ほら急げ。可愛い子ちゃん達が待つてんだろ？』

玉の中からくぐもった声が急^せかす。

その声に、帝太郎はちらりと腕時計を見遣ると、
「げっ！」

足元の弁当を引っつかんでアパートを飛び出す。

さっきまであんなに痛がっていたはずの臀部^{でんぶ}さえ庇^{かば}おうとしない。察するに、先程までの態度、半分は玉郎への甘えがあったのだらう。靴を履くのももどかしく感じられてしまうくらい押っ取り刀で飛び出したものだから、コートを玄関先に置き去りにしてしまった。しかもそれに気付いたのはアパートの階段を駆け下りた後。あまつさえ、部屋の入り口には鍵までかけてしまっていた。

階段を見上げて一瞬立ち止まったけれど戻っている時間はないの

でそのまま道に出る。

その途端、身を切るような冷たい風に吹きつけられて、またもや動きが止まってしまふ。

風を遮^{かへ}ってくれる壁がなくなった事が何だかとっても恨めしい帝太郎である。

（どうしよう）

一度は諦^{あきら}めたコート^{コート}の事が頭^{かす}を掠^{さら}めてしまふのも無理はない。迷いながら見上げた空にはどんよりと重苦しい鈍^{にび}色^{いろ}の雲。今にも雪になりそうな、こんな空模様の日に、コートを忘れてしまったのを後悔する時間的ゆとりは、やっぱりない。

もう一度確認のため腕時計に視線を落とすと、それに弾かれたように一気に駆け出す。

針は七時四〇分を指していた。

託児所まではバスで大体十五分。

最寄りのバス停までは徒歩一分。

そこを四十二分に発車するバスに乗れなかったら、完全に遅刻してしまう――。

託児所は、三階建ての鉄筋コンクリートの一階に位置していた。

正面の入り口頭上に掲げられた淡い黄色の看板には、丸っこいグリーンの文字で『つくしんぼクラブ』とある。文字の両サイドには絵本の中から持ってきたようなほのぼののタッチのつくしが数本と、寝惚け眼がとつてもキュートなカエルが一匹。

冬の寒空の下でこれ程不釣り合いな看板があるうか。

「おはようございます、所長。今日は早いですね」

息を切らして所内に駆け込むと同時に、エプロン姿の女性従業員に声をかけられる。

今時珍しい、100%天然の黒髪をショートカットにした彼女は床を掃く手を止めると帝太郎に微笑みかけた。前髪をピンで分けているせいか、大きな瞳がとても印象的だ。綺麗、というより可愛らしいという感じ。

「おは…よ……」

そんな彼女に、ようようやつと、といった切れ切れの声で挨拶の言葉を搾り出す帝太郎。

せっかく出掛けに玉郎が整えてくれた髪の毛もネクタイも、すっかり乱れてしまっている。

肩で息をしながら腕時計に視線を落とす。……と同時に、入ってすぐ真正面の壁にかけられた鳩時計が見計らったように八時を告げた。

その鳩時計の、振り子が揺れる規則正しい動きを見ているうちに、少しずつ呼吸が整ってゆく。

子供の喜ぶからくり時計、という発想はともかくとして、今流^は行いの「小人が出てきてルンタッタ」というようなメルヘンチックなものではなく、古式床しい鳩時計を選んでる辺りが何とも帝太郎らしい。

実は彼が幼い頃お世話になっていた小児科に、こういう鳩時計があった。

帝太郎が風邪なんかをひくと、母はわざわざ十四時や十五時といった、鳩が出てくる時間を狙ってはそこへ連れて行ってくれたものだ。もちろん、帝太郎の病状がそれほど悪くない時に、ではあったが。

それだけの事で帝太郎にとってその病院は「鳩時計の見られる楽しいところ」として記憶に残った。

願わくは、『つくしんぼクラブ』に連れて来られる子供達にとっても、ここがそんな場所になってくれればと思う。

掃き掃除の最中で、部屋の隅^{すみ}の方へ追いやられている小さな机や椅子の群れ。

反対の一角にはカラフルな色の、大きなおもちゃ箱も見える。それからみ出すようにして、こちらを見つめているのは子供達に人氣ナンバーワンの、クマの縫いぐるみだ。その子の、ボタン製の黒い瞳が何だか泣いているように見えてしまう。

子供達がいる時には決して感じられない寂しさが、今はある。

机や椅子、おもちゃ、それから鳩時計。ここにある全てのものは子供達がいてくれてこそ輝く事が出来るもの。

だから小さな天使達にもここにいる間は輝いていて欲しい。

それが帝太郎のささやかな願い。

ここを開設する前から「これを買おう」と心に決めていた鳩時計を見つめていると、何だか初心に帰れるような気がする。

それなのに――。

「八時か。そうだね、僕にしては早いね」

入り口のガラス戸に書かれた文字によると、営業時間は『午前八時半～午後十時まで』となっているので、責任者たる彼が八時出で早いというのは困りものだ。ミーティングなどをする時間だって必要な^なのだから。

「ところで菜奈^{なな}ちゃん、今日の受入れ予定は？」

「えつと……八時半、十時、三時半に一時預かりの子達が各一名ずつ。その子達以外はいつものメンバーです」

ほうきを小脇こわきに抱えると、エプロンのポケットから小花柄のスケジュール帳を取り出す川崎 菜奈子ななこ。手早くページをめくると、二月三日の欄らんを読み上げた。

「飛び入りの子が三人かあ。いつものメンバーと合わせると十人越えちゃうね。三人で平気かなあ」

そこまで告げたところで

『帝太郎、その三人目を忘れてねえか？』

巾着きんちやくの中からいかにも不機嫌ふきげんそうな声音が響く。

「あ、ごめん！」

言わずと知れた玉郎の声に、帝太郎がいそいそと玉を取り出す。

「所長つてばいっつも玉郎さんの事忘れちゃうんですね」

まるで悪戯いたずらつ子をなだめる母親のような口調でそう告げる菜奈子の口ぶりからすると、玉郎はここ『つくしんぼクラブ』において顔かお馴染なじみの存在らしい。

「ったく笑いごつちゃねえんだぜ？」

帝太郎の掌の玉から水蒸気のような霧が発生したかと思うと、見る見るうちに人型になっていく。人型は玉郎の姿をとると同時に、眉間みけんに皺しわを寄せてそう吐き捨てた。

常軌じょうきを逸いつしたその登場を目の当たりにしても、菜奈子には全く驚いた様子がない。

強いて気になる事があるとすれば……。

「玉郎さん、その格好……」

笑いを必死に堪えたように告げる菜奈子に、玉郎が慌ててエプロンを脱ぎ捨てて。ついでにたすきたすきも解ほどいた。

玉封じの鬼は、その主人が望めばどこでも封じの玉を出入りする事が出来るのだが、その際身につけていた着物等も一緒に玉内に収まってしまふようなのだ。

それは、彼らが手にしていた物も例外ではない。だから先程弁当

だけが玉に入るのを免れたのは、玉郎が意図的に手を放したからに過ぎないのだ。

このシステム、身ひとつで取り込まれてしまつて次に出た時、裸……というのよりは随分マシなのだが、たまにこんな風に妙な格好で出て来てしまう事があるのが困りものなのだ。

エプロンとはかくとして、たすき掛けまでして本格的に主夫業をこなしているのだと宣伝してしまつたみたいで、何だか赤面ものの玉郎である。

考えてみれば、こんな所帯染みた格好で菜奈子の前に出てしまう羽目になつたのも、元はと言えば帝太郎のせいではなかつたか。

自分に向けられた玉郎の冷ややかな視線に、

「……だから、ごめんつてば」

帝太郎が謝罪を述べる。本人に悪気はないのだが、間延びした口調のせいで口先だけの言葉に聞こえてしまふ弁解である。

そんな帝太郎の言動に、玉郎はますます眉間の皺を深くすると

「お前、今夜は店屋物でも取るんだな」

あくまで素っ気なく、帝太郎にとって最も手痛い言葉を告げた。

「そんなあゝ。今度から気をつけるから許してよ。ね？ 玉ちゃん。このとーり！」

帝太郎は玉郎の手作り料理が大の好物なのだ。加えて彼の貧しい財布の中身では、店屋物でまともな食事なんて夢のまた夢で。

あたかも殿様にかしづく家来よろしく頭を下げると、伺うように玉郎の方を見遣る。

「……つたく、やつてらんねえぜ」

帝太郎に背を向けてはいるが、その仁王立ちした彼の身体からは許してやるぜというオーラが立ち昇っている。

ここの一日は、殆ど毎日こんな始まり方をする。

この職場に勤め始めて一年余りになる菜奈子だが、こんな二人のやり取りを見ているとその片割れが異形だという事が時折信じられ

なくなってしまう。

確かに初めて玉郎を目にした時はとても怖かったのを覚えているし、「嘘だ」という思いが凄く強かった。

それが今では何でもない事のように思えてしまっている。

玉郎の頭には確かに二本の角が覗いている。

その口には鋭い牙が見え隠れしている。

銀色の艶やかな長髪だつてどこか人間離れしているし、何と云っても小さな玉を靄もやのようになって出入りしている姿は人外じんがいの存在以外の何者でもない。

それでも彼が悪い者でない事は何故だか直感的に理解出来たから。だから自分はここを離れられないのだと実感する。

最初、ここの面接で自分が玉郎の姿に驚いてしり込みしてしまつた時、「もしかして君、玉ちゃんの角が見えるの!？」なんて言われて逆に脅おびえられてしまつたのを思い出す。

あの時の帝太郎の言を鵜呑うのみにするならば、普通、大人には玉郎の頭の角は見えないのだそうだ。

——玉ちゃんの角が見えるのは純粋な心を持った子供と、強い霊力を持った一部の大人だけなんだ。

大抵の者の目には、玉郎の姿は古風な出で立ちをした大男、ぐらいにしか映らないのだと言う。

自分に感知出来ないものを、人は信じようとはしない。

もしかすると、未知なる領域を認めるのが怖くて無意識の内にそれを排除しているに過ぎないのかも知れない。

子供達の間で幽霊話や妖怪話が流行るのはいつの世も常のようなものだ。だから何人かの子供が同じ事を言つたとしても、大人は自分達が生徒であつた頃を思い出して、「よくある子供の噂話」程度に認識してしまう。

そのお陰か、今までにも何度か子供が玉郎を指して「あのお兄ちゃん、頭に角が……」なんて言つた事があつたのだが、大人達が真面目に取り合う事はなかった。逆に、「失礼な事を申し上げまして

……」と恐縮される事の方が多かったくらいだ。

——玉ちゃんの事、口外する？

君が今見ているのは幻覚だよ。角のある人間なんているわけないじゃないか。

そう言われるより、どこか寂しそうに微笑みながら告げられたこのセリフの方が、菜奈子には堪えた。

（この人達を困らせたくない）

わけも分からずそんな風に思った事を、今でも鮮明に覚えている。

「ほらほら、二人とも夫婦喧嘩はそのくらいにして下さいね」

未だ膠着状態の二人の間に割って入ると、間髪入れずにエプロンを押し付ける菜奈子。

「さ、お仕事、お仕事」

いつものように始まった喧嘩は、いつものようにピリオドを打たれる。

菜奈子の言葉に不満げな顔の二人ではあったが、渋々エプロンを身に着け始めたのだから上出来だ。

「二人ともお似合いですよ」

帝太郎のエプロンはアヒル柄。玉郎のそれはキリン柄だ。どちらもこここの看板と同じようにほんわかタッチで描かれている。

「え？ 本当？」

「……」

菜奈子の言葉に対する反応は二人とも正反対で——。

ニコニコと笑いながら上機嫌でターンしてみせる帝太郎に対し、玉郎はムスツとして無言だ。いつもならここまで不機嫌にエプロンを受け取る事はない玉郎だが、先程家で愛用している飾り気のないものを脱いだばかりだと思えば無理もあるまい。

「玉ちゃんも似合うつてさ。良かったね」

一人で喜んでいれば良いものを、この能天気な春風男は玉郎の心を逆撫するような事を何の躊躇ためらいもなく口の端はに乗せる。

「……普通男はそんな事じゃ喜ばねーよ」

溜め息まじりに告げられた玉郎の言葉。明らかに言外に「これが俺の主人だなんてよ」という一文が伺える。

「ほらほらまたあ！　口はお休みして手を動かして下さいね。……そうだ！　玉郎さん、あつちの棚のはたき、頼めます？　私じゃ上の方、届かなくて」

そんな二人の様子を物ともせず、てきぱきと指示を出していく菜奈子。

さりげなく出した指示で、帝太郎と玉郎の間に距離が出来るように配慮するのも忘れない。実は彼女こそ、ここの真の責任者なのではあるまいか。

「で、所長は買い出しお願いしますね」

「買い出し？」

紅茶もお茶もお菓子もジュースも……それからそれから……うん……トイレットペーパーだって買ってきたばかりのはず……。ぶつぶつ言いながら考え込んでいるらしい帝太郎に、菜奈子が吐息をひとつ。溜め息をつくたびに幸せが逃げると誰かが言っていたけれど、ここに居たら一生幸せにはなれないわね。そんな事を思いながら。

「……お忘れになったんですか？　今日は節分ですよ？」

お祭り好きの帝太郎の事だ。いざ豆まきだ！という段になって肝心の豆がない、なんて事になったらどんなに駄々をこねる事か。考えただけで頭が痛い。

「あ、そうだった」

普通の人間なら自分が楽しみにしている催しに関わる事物を忘れたりする事はまずない。しかし相手が帝太郎となるとそうは言っていられない。

「昨日、豆買って来て下さいねってお願いしたじゃないですか。それなのに……」

今朝、「おは……よ……」なんて息も絶え絶えに入って来た帝太郎

の手にはそれらしき物の存在はなくて。

（まあ、いつもの事なんだけど……）

何を頼んでも帝太郎は本当によく忘れてくれる。のほほん……と
しているのは何も見た目だけではないらしい。

普段ならどんなに帝太郎が惚けていても玉郎がしつかりサポート
する。今回だって、玉郎の頭の中には今日が節分だという事は、恐
らくちゃんとあったのだ。それでもその事を帝太郎に示唆しなかつ
たのは、やはり彼が「鬼」という存在だからだろうか。

「そいつじゃ当てになんねえーわな……」

力任せにはたきをかけながら、玉郎がぼそつと呟く。光が差し込
んだ状態で見たらば、さぞかし埃が舞い飛んでいるだろう。

普段主夫をしている玉郎は、実は割と家事全般についてうるさい。
その彼が、こんなに力任せにはたきをかけるのは、気持ちが苛立っ
ている証拠だ。

皮肉たつぷりで告げられた玉郎のその台詞は、離れたところで作
業していた帝太郎の耳にもしつかり届いた。

「玉ちゃんの意地悪！ 教えてくれたってよかったじゃん！」

言いながら玉郎を睨み付ける。

「冗談じゃねえ！」

鬼たる玉郎に「鬼は外っ！」と唱える追儼ついなの豆を買う手助けを
しろ、だなんて何とも酷な話だ。

「玉ちゃん、罰として今年も鬼の係ね」

これが嫌で、今朝は彼なりになるべく目立たないよう、おとなし
くしていたのに。

つくづく運のない玉郎である。

何もなくとも、例年何だかんだと鬼の役は玉郎にやらせる癖に、
もつともらしくそう言い含めると、

「それじゃ、行って来まあす」

にこやかに店を後にする帝太郎。

スーツ姿にエプロン……という何ともアンバランスな格好だが、

当人が気にしていないようなので問題はあるまい。

道行く人々も、帝太郎のほんわかった雰囲気にとびつたりのエプロン姿に、案外違和感を覚えないかも知れない。

「……ついてませんね」

「お気遣いなく……」

苦笑を浮かべながらも自分を気遣う菜奈子に、玉郎は溜め息まじりにそう告げた。

帝太郎が大人気ないのはいつもの事だ。そう思って諦めている。今から十二年前、初めて自分が彼の前に姿を現わした時からずっとずっとそうだった。

（ま、あれがあいつのいいところでもあるんだけど……）

どこか遠い目をして微笑する玉郎の姿を、菜奈子はきょとんとした顔で見詰めていた。

あれは雪のちらつく、底冷えのする日の事だった。

師走の中頃。確か日付は十二日。

帝太郎、二十歳^{はたち}の誕生日だ。

通帳、洋服、わずかばかりの食料……。

とにかく自分が大事だと思う物を持てる限り引つつかんで家を出たのが十八の時。

こう書くとまるで家出のようだが、実際のところ両親は帝太郎が家を出る事を了承してくれていた。

お前がやりたいようにやればいい。それは父のセリフであり、困った事があつたらいつでも言うのよ、と言ってくれたのは母だった。我俣を言つて家を出たという気持ちが強かったから、なるべく両親を頼るような事はすまい。

帝太郎はそう心に決めて実家を後にしたのだ――。

首から下げた巾着袋に入った玉も、その時持ち出した物の一つだった。

こんな玉、本当は置いて行こうかとも考えた。持っていたって実用性があるようには思えなかったし、何よりお金になりそうにない。しかし、両親が「これだけは――」。そう言つて持たせたがった唯一の品だったから。

（そう言えばこの玉、いつから持つてゐるんだっけ……？）

考えてみると、物心つく前から身につけている。それが無い事を思うと何故だか寂しいと感じてしまう程に。

右も左も分からず、殆ど手探り状態で始めた一人暮らし。

不動産屋には兎に角安いトコ！　そう言つて格安の物件を紹介し

てもらった。

無論、未成年である帝太郎に賃貸契約を結ぶ事は出来ないわけで、出て早々で情けなくはあったが、恥を忍んで両親に頼る羽目になっ
てしまった。住まいがなくてはとうしようもなかったからだ。

とは言え、両親からの仕送りがあるわけでなし、一難去ってまた
一難……と言った具合に、一人暮らしの道のりはかなり険しいもの
だった。

帝太郎はとりあえずレンタルビデオショップとコンビニのバイト
……なんていう二足のわらじで家計を賄った。幸い丈夫だけは取り
柄だったから、朝から晩まで殆ど無休状態で働いても何とか頑張れ
た。

それでも毎月家賃に三万円取られてしまつのは、バイトの身には
結構堪えたものだ。

生活が苦しくなつて一番削りやすいのは矢張り食費。一時期、帝
太郎はいつも腹ペコ状態だった事がある。

だが不思議な事に、極限に達するまでにはどこか頼りなげに見え
る雰囲気のお陰か、誰かが何かをご馳走してくれた。

大抵の場合、それは同年代の女の子達で、母性本能をくすぐられ
てか、こぞつて手料理を振舞ってくれた。

普通そんな風に女の子にちやほやされると同性からは煙たがられ
る場合が多い。しかし、帝太郎の場合は「人畜無害」の札をつけた
ようなのほほんとした春爛漫顔の効力か、嫌がらせを受けた経験も
なかった。

むしろ、同性からも良くしてもらふ事の方が多かつたくらいだ。
そういう親切な人達との出会いを得る場所として、若者が集まり
やすい前述のバイト先二軒はかなり重宝した。

そんな感じで、一人暮らしも二年経てばそれなりに落ち着いてい
て――。

「今日はぼくのだ〜んじょお（、）びい〜」

持ち前の能天気さで一人暮らしをエンジョイする帝太郎。

しかし、その日は何故か玉の事が気になって仕方がなかった。

それが原因かどうかは分からないけれど、今回の誕生日は一人で過ごしたいような、そんな気分になった。

だから「誕生日を祝ってやろう」と言ってくれたみんなからの誘いを断って、一人でお祝いモードなのだ。

沢山の人に親切にもらえるから、ちゃっかり四号サイズのバースデーケーキ……なんて贅沢品を買うゆとりも出来ていたりする。こたつに入ると、上機嫌でケーキに色とりどりの蠟燭を立ててゆく帝太郎。その数、きっちり二十本。小さなケーキに立てるには多すぎるようにも思えたが、彼にはそんな事お構いなし。鼻歌交じりで容赦なくケーキに穴をあけていく。

立て終わった蠟燭全てにライターで火をつけながらも、手が無意識の内に胸前の玉にいつてしまうのは何故だろう。

「暖かい……？」
あった

今までは無機質の冷たさしか伝わってこなかったそれなのに、ここ二、三日で何となく熱を帯びてきたように感じられる。

「まさかねえ」

何度か袋から取り出してみたけれど、別段いつもと変わったところは見られなかった。

「そりゃあ、僕ん家は普通の家じゃなかったけどさ……」

それが原因で出てきたのだが、家の事が全く気にならなかったわけではない。

年が十二離れた弟は、元気でやっているだろうか？

時折ふとそんな事を思う。

（僕がいなくなったせいであの子、苦勞してるんだろ……なあ……）
今の時代には、ともすると古臭くさえ思えてしまふ、後継ぎ問題。

——ギョクフウシ。

父親がよく口にしていたそれは一体何の事だったのだろうか？

「インチキ霊媒師の親戚みたいなもんかな？」

決して神社仏閣の類いではないはずなのに、広大な敷地に「御霊^{みたま}屋」なるものを有していた実家。

子供の頃、何度か入った事がある御霊^{そし}屋には、燭台に灯る十数本の蠟燭の薄明かりに照らされて、沢山の小さな玉が並べられていた。その様は、幼い自分にも不思議と神聖に感じられたものだ。そして、その余りの神々しさ故に怖いとさえ思ってしまう場所だった。

そんな建物が、当然のように鎮座している家なのだ。察するに、ギョクフウシというものも、ろくでもないものに違いない。

幼い頃はわけも分からず父親のなすがままになっていた、真言の唱え方や印の組み方なんかの修行。

物心ついてから気付いたのだが、同年代の子達で、そんなものを教え込まれている者は一人としていなかった。

血の影響か、元々そう言う素質に長けていたのか、帝太郎は乾いた大地が水を吸い込むように、それらの技術を難なく身に付けたものだ。

「ギョクフウシ、ねえ……」

小学校に上がる頃には「みんなと一緒にいたい」という思いから、家業について父に聞こうとすらしなくなっていた。

父も元々多くは語らない人だったから、帝太郎が尋ねない事について口を開かない。だから、それがどんな字をあてるものなのか、今日まで帝太郎は知らずにきてしまった。

ただ、修行だけはある目的のために黙々と続けていた。

仇を討つため――。

幼い頃は、自分にそう言い聞かせていたけれど……本当は自責の念からなのだと今なら素直に認められる。

父の後を継ぐつもりはなかったのに、十八の歳まで家にいる事が出来たのも、また修行を続ける事が出来たのも、多分そのためだ。

（そう言えば父さんも首から同じ物を下げていたつけ）

ギョクフウシと言う得体の知れないものになるのが嫌で、家から逃げてきたというのに。もしかしてこの玉を持っていたら駄目なん

じゃないだろうか？

ふと、そんな思いが頭をよぎる。

（何で家を出た時、^{あのとき}この玉を置いていくと言えなかったんだろう？）
力ない溜め息をつく、帝太郎は手にした玉を蠟燭の灯りにそつ
とがざした。

件の玉をよく見れば、その答えが見つかるような気がしたから――
。

今まで気付かなかったのが不思議だが、これは御霊屋にあった玉
とよく似ている気がする。

もしかしてギョクフウシというやつは真言と印、それからこの玉
を用いて何かを行う者達の事なんじゃないだろうか？

ぼんやりとそんな事を考えながら、なおも玉を見つめる。

「……？」

不意に、炎に照らされた玉の中に、何やら文字らしきものが浮か
んで見えた。

今までこの玉をまじまじと眺めた事はあっても、光に透かした事
はなかったのでこんな仕掛けがあるなんて気が付きもしなかった。

“かぎりなき雲ぬのよそにわかるとも人を心におくらさむやは”

「和歌？」

水にたゆたう女の長く美しい黒髪のように、その文字は玉の中に
浮かび上がっている。

「まいったなあゝ」

思わず頭を抱え込んでしまった帝太郎である。

「僕、古典って得意じゃないのにいゝ」

得意じゃない、と言っても現代国語に比べれば、の話だ。

帝太郎は自覚していないのだが、実は彼、それなりに古典の才能^{センス}
があつたりする。

文法的なものは分からないけれど、歌意としてはこんなものかな

？……くらいは理解出来る程度に――。

“雲のように遠い異境に別れようと貴方を私の心の中に連れて行きます”

「かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは、か……」

とりあえず口の端にのせてみた。

昔、古典の先生が和歌を理解する最善の方法はその歌を何度も繰返し読んでみる事だと言っていた。それを思い出したのだ。

「誰が詠んだ歌だろ？ それより、そもそも何に載ってる歌だっけ？」

玉に浮かんだ文字を、何度矯めつ眇めつしてみたところで、その答えが書いてあるはずもない。

そんなわけでほとほと困り果ててしまった帝太郎である。

『この歌はなあ、読み人知らずの歌さ。つまりは作者不明。んでもって載ってんのは古今和歌集巻第八、離別歌のところだ。さて、他に質問は？』

――と突然、手にした玉からそんな声がしてきたものだから、さしもの帝太郎も驚いて思わず玉を放り投げてしまった。

『げ！ てめえ、何しやがる！』

綺麗な放物線を描きながら宙に舞う玉。

声は、そこらなおも続いている。

カラン……。

乾いた音を立てて玉が床に転がった時、帝太郎はハッと我に返った。

「わ、どうしよお！」

慌ててそれを拾うと、眉根を寄せて凝視する。

手の上で何度も転がしてみたけれど、どこにも傷はついていないようだ。どうやら畳とこたつ布団という環境に助けられたらしい。

「良かったあゝ、ひび入ってない……っ！」

ホッとしたのも束の間、突然玉から霧のようなものが噴き出してきたものだから、思いっきり驚いてしまった。

今度は辛うじて放り投げたりはしなかったものの、思わず目をつぶってしまう。

「ったく、やってらんねえぜ！」

その声に恐る恐るまぶたを開くと、見知らぬ男が仁王立ちで自分を見下ろしていた。しかも その装いが平安貴族然とした束帯姿……ときているものだから思いっきり不自然で……。

「あ……あのゝ、どちら様……？」

突然玉から湧いてきたような男に放つ言葉だ。もつと他に言い様があるうに、腰抜け状態で座り込んだ帝太郎の口から放たれた第一声はそれだった。

「……あん？ 俺か？ 俺は見ての通り“玉封じの鬼”だ」

対する男の返事もどこか間が抜けている。

「タマフウジノオニ？」

ちんぷんかんぷんだといった面貌で、帝太郎が彼の言葉を繰り返す。

「それ、なあに？」

極めつけはこの一言。

「お、おい、お前、玉封師だろ？ 俺の主人のっ！」

「……悪いけど……僕は玉封師なんかじゃないよ」

この柵を、やっとの思いで生家に置いてきたというのに……。こんなところで引き戻されたんじゃ、たまったものではない。

帝太郎はいつになくつつけんどんな物言いをすると、眼前の男の様子を伺った。

「……玉封師じゃないって……。だってお前、俺を呼び出したじゃねえか！ 今更『はい、そうですか』って玉に戻れってえのか！？ また何百年も俺と波長の合う奴が現れるのを待って言うのか！？」

玉封じの鬼と名乗った男が、銀色の髪を振り乱しながら一気にまくし立てる。

下から見上げる格好になっていたから今まで気付かなかったけれど、自ら「鬼」と名乗ったように、その男の額には二本の角が見え隠れしている。

それなのに、何故かちつとも恐ろしさを感じさせない、不思議な雰囲気包まれた異形。

「呼び出したって言われても」。悪いけどそんな覚えはないんだよお……」

困ってしまった帝太郎である。

こんな風に死に物狂いで訴えられてしまつては——例えそれが人外の者であっても——冷たく突き放すのが難しい事この上ないではないか。

情にもろい自分の性格を、今日程恨めしく思つた事はない。

「呼び出した！　だつてお前、和歌、口にしただろ！」

「和歌？」

確かに読んだ事は読んだけれど——。

「歌意だつて理解して口にしたんだろ！？　だつたら立派に俺を召喚するに値する言霊^{ことだま}だ！　だから責任取つてもらわねえと困るんだ！　玉封じの鬼は一度呪^{しゅ}をかけられちまつたらその相手が死ぬまでそいつに仕える運命^{さだめ}なんだからな！」

（呪^{しゅ}なんてかけた覚えのないのに……）

無性に泣きたくなつてきた。でも、それは眼前の男にしても同じようで——。

この、饒舌かつ必死な様子から考えて、ここで自分がさじを投げてしまつたら、何だかとても可哀想な気がする。

「……保障は出来ないよ？」

「……？」

「だから……、その……玉封師になるつてやつ……。それでも良いんなら……」

主人になつても構わない。そう言外に含ませる。

「いい！ 何百年も待つよか、よっぱどマシだ！ よろしくな、帝太郎ちゃん！」

思えば幼い頃からずっと生活を共にしてきた玉である。その玉から出て来た眼前の男が、自分の名前を知っているのは何となく理解出来る。でも帝太郎にとつての彼は、つい今し方までただの玉——お守り——でしかなかったのだ。

「ねえ、名前とかないの？」

「だから、玉封じの……」

「それ以外」

呼び掛ける度に「ねえ、玉封じの鬼」なんて言わせる気だろうか？ 意図せず溜め息がこぼれる。

「そんなのねえよ。名前なんざ、随分昔におさらばしちまったし。

……まあ、どうしてもってんなら勝手に付けてくれて構わねえけど。好きにしまな」

「それじゃあ……桃太郎にちなんで」

「玉太郎は却下！」

「勝手に付けていいって言つたくせにいゝ！」

眼前の鬼のセリフに、ぶつくさ文句をたれる帝太郎。しかし持ち前の能天気さですぐににこやかな笑みを浮かべる。

「じゃ、玉郎！ うしんぐん これで決定ね。異議は認めませゝん。よろしくねゝ、タマ」

「た、タマ……？」

唐突に差し出された手を条件反射で握り返してみたものの、帝太郎の言葉に玉郎は思わず目を見開く。

「玉から出てきたからタマ」

その発想では玉太郎と大差ないのではなからうか？

「でも今、玉郎って——」

「それは本名」

「じゃ、タマってのは」

「ん〜？ 猫呼んでるみたいで可愛いから！ 僕、ペットって飼った事なかったからさ、一度気分味わってみたかったんだよね〜」
理由はそれだけ。

言いながら満面の笑みを浮かべる帝太郎。

いつから俺は愛玩動物になったんだっ！！

そんな事を、声を大にして言いたい玉郎であつたが、長年の付き合いで帝太郎の性格は知悉しているつもりだ。

結論を言ってしまうえば、つまりは何を言っても無駄という事で――
！。

がつくりと肩を落とすと、

「……せめて“タマ”で切るのだけはやめてくれ……」

消え入りそうな声音でそう呟いてから、恨めしそうに帝太郎を見やる。

「ん〜。じゃあ……玉ちゃん！」

単に「ちゃん」が付いただけだから「タマ」と変わらない気もするのだが、ないよりは幾分かマシに思えた。……とすれば、この辺で妥協するのがよからうか。

そう考えて気を取り直すと

「こつちこそよろしくな！ 頼りにしてるぜ、玉封師！」

殊更「玉封師」のところに力を込めてニタリと微笑^{わら}う。

玉郎の、こういう切り替えの早さは帝太郎と似ている気がする。

玉郎と帝太郎の波長が合ったというのは案外そういうところ起因しているのかも知れない。

「玉封師の件は保障出来ないって言ったじゃん！」

抗議の声を上げながら玉郎を睨み付ける帝太郎の頭を、挨拶代わり……と言わんばかりにガシガシと撫でまくる玉郎。

俺じゃなくてお前が猫だ！

無言で帝太郎にそう刷り込んでいるかのように――。

ひとしきりそうした後、玉郎はふとこたつの上で視線を止めた。

「ところでな、帝太郎。そこ、大変な事になってねえか？」

「え？」

玉郎の指差す先を見て一瞬頭が真っ白になってしまった。

長い事蠟燭に火をつけっぱなしにしていたため、ケーキの上には生クリームを覆うように五つの色が入り混じった極彩色の蠟コーティングが施されていた。

倒れた蠟燭の大半は消火していたが、中には辛うじて数本、炎を宿したままのものもある。

「あー！ーっ！！！」

これがおよそ十二年前。二人の出会いの大体の経緯^{いきざつ}である――。

「たっだいまあゝ」

上機嫌で『つくしんぼクラブ』の入り口をくぐった帝太郎を、聞き慣れた声が出迎える。

「おかえりなさい！ 帝ちゃんセンセ！！」

「なみた君、ただいまあゝ 今日一番乗りだねゝ」

足元に駆け寄ってきた三歳位の小柄な男の子を視界に捕らえて、満面の笑みを浮かべる帝太郎。

しゃがみ込んで彼の視線に自分のそれを合わせると、良い子良い子をしてあげる。

ここ、『つくしんぼクラブ』には、ほんの一日だけ預けられる子もいれば、一年契約で毎日のように預けられる子もいる。

今、子犬のように帝太郎にまわり付いているのは、後者に属する子供で、名を青川なみたという。

「帝ちゃんセンセ、それ、なあに？」

子供というのは実に好奇心旺盛な生き物である。

帝太郎が手にしたナイロン袋を目ざとく見つけると、吸い込まれそうなほど澄んだ瞳で質問を浴びせてくる。

「これ？ さくて何かなあゝ？」

「ヒントーいゝ。今日は節分ですゝ」

ニコニコと微笑みながら袋を高く掲げる帝太郎の言葉に、菜奈子が歌うような声で付け加える。

「ヒント二ゝいゝ。小さいくせに当たると滅茶苦茶 痛い……」

真剣な顔で帝太郎の手元を見上げるなみた。

そんな彼を軽々と抱き上げると、玉郎が顔をしかめてそう呟く。

「玉ちゃんセンセのきれいなものなの？」

「使い方にもよるな」

肩になみたを載せた格好で、玉郎が大きな溜め息を一つ。

「玉ちゃんはこれだから」

両手の人差し指を角のように立てて頭の両サイドにあてがうと、帝太郎はウインクをしてみせた。

「わかったあ！ おまめさん！」

「当つたり〜」

突然両手を広げて叫ぶなみたに、玉郎が慌てて手を添える。

「じゃあ……玉ちゃんセンセ、ことしもオニさんやるの？」

「……」

肩の上から自分の顔を覗き込むようにして尋ねてくるなみたに、玉郎は思わず言葉に窮する。

「じゃ、なみた、オニはそと言わない。おまめさんも玉ちゃんセンセに当たらないよーに投げりゅ。だから……」

鬼の役は逃げずにやってね。言外にそう含ませる。

こんな時、子供は罪作りだ、と玉郎は思う。大人では言えないような恥ずかしいセリフを直球でさらっと言ってのけるのだから。

それは、心の底から発された言葉だけに心がほんわか温かくなつて、それ故に逃げ道を塞がれてしまう。

「よっしゃ。任しとけ！」

今年もこうして鬼の役を快諾してしまう。

それが不愉快に感じられないというのも子供の凄ところなんだろう。

肩に載せたなみたをそつと床に下ろすと、その頭を豪快に撫で回す玉郎。

その姿を見た菜奈子が、吹き出しそうになるのを必死に堪える。

何だかんだ言いながら玉郎は子供好きなのだ。その辺りも帝太郎と波長が合ったということを裏付けているのではなからうか。

「玉ちゃんはね、本当は鬼さんやるの、大好きなんだよ。いつも先生に、鬼さんについてお話ししてくれるんだから」

帝太郎の告げたそれは、常日頃から玉郎が言っている「玉封じの鬼はなあ」だとかいう小言に対するささやかな報復。

こんな二人のやり取りを見ると、つくづく大人気ないな、なんて思ってしまう菜奈子である。でも反面、そんな二人だからこそ好きなのも事実で――。

気が付くと、彼らのことを温かい目で見守ってしまっている。

「あ、そういえば所長」

「ん？」

部屋のほぼ中央に位置するテーブルの上に、買ってきた物を置こう、と向きを変えた帝太郎を呼び止める菜奈子。

「おかしいんですよ」

「……？」

「ほら、もう三十分でしょう？ 本当なら八時までにお父様と一緒に女の子が来るはずだったじゃないですか……」

予定では八時半受け入れ予定になっていた子だが、昨日になって父親から「仕事の都合がつかないので八時過ぎに連れて行っても構わないでしょうか？」との問い合わせがあった。

子供たちをあやす帝太郎に伺いを立てると、のんびりとした口調で「いいよ」と返った。

それで「少しぐらいでしたら」と答えて受話器を置いたのだ。

いつもなら、帝太郎に忘れて欲しくないことは玉郎にも伝えておくようにしている。そうしなければ駄目だと言うのは分かっていたのに……。

忙しくて言いそびれてしまった。

だから今朝、菜奈子はいつもより気持ち早く出勤して来たのだ。

先ほど帝太郎に請われて本日の受け入れ予定のスケジュールを、意図的に変更前のまま読み上げてみたのだが、帝太郎は全く無反応だった。

あえて口に出すまでもなかったので黙っておいたのだが、やはり帝太郎は女の子の件をすっかり失念している風だった。

それで、内心、早く出ておいて正解だったなと思っていたのだ。
それなのに……。

帝太郎がやって来てしばらくしても、その女の子は一向に現れる
気配がなくて――。

そうして今に至る。

「まだなの？」

それは、部屋にいるメンバーを見れば一目瞭然。

「名前は？」

「えっと……」

ガサガサと帝太郎のデスクの上を引つ掻き回す菜奈子。彼のデスクの上が散らかっているのはいつものことだが、そのお陰でこついう時に苦勞する羽目になる。

「大事な資料は菜奈ちゃんの机に置いといたほうがいいぜ？」
なみたをあやしなから発せられた玉郎のセリフも、もつともである。

菜奈子はやつとの思いで帳簿を見つけ出すと、

「相沢美紀ちゃん。あいざわ みき 歳は四歳」

該当ページを開いて帝太郎にそれを手渡す。

「家には連絡してみた？」

「もちろん！ 所長が買物に行つてらっしゃる間にも数回……
携帯にもかけてみたんですよ」

「で？」

「駄目でした」

菜奈子の言葉を聞いて、帝太郎は首を傾げる。

「えっと、家族構成は、と……」

父、相沢 けいこ 圭吾。

母、相沢 あつこ 敦子（死別）。

どうやら父子家庭のようだ。

帳簿に記された住所は、ここのすぐ近所。

相沢、相沢……と何度か小声で呟いてから、思い出したようにポ
ン……と手を打つ帝太郎。

その子の父親が、娘を預ける前にちょっと話したいことがあるか
ら、と電話で告げてきたのは一週間ばかり前のことだった。

それで今日は普段は着ないスーツを着て出勤するよう玉郎に強要
されたのだ。

美紀ちゃんなる子と、一度なりとも面識があればピンと来る帝太
郎だが、いかんせん、電話で年恰好を聞いたただだったからイメー
ジが湧きにくい。

思い出されるのは電話越しに聞こえてきた、まだどこか迷ってい
るような、はつきりしない父親の声ばかり。

「……玉郎」

呼びかけられた玉郎が、なみたを高い高いしていた手を止めて振
り返る。

帝太郎の、いつもとは違う真面目な声音に、身体が自然と固くな
る。

「やっぱセーター着て来ればよかった！」

どこか論点がずれている。

今朝、帝太郎が折角の節分の日、動きにくいスーツは嫌だとい
ねたのを思い出してあからさまに眉根を寄せる玉郎。

「……今はそんなこと言ってる場合じゃねえだろ」

少し間を置いて、誰もが思う、至極まともな言葉を吐き捨てた。

相沢圭吾が娘——美紀——を伴って『つくしんぼクラブ』を訪れたのは、翌日木曜日の事だった。

圭吾に伴われた美紀を見て、思わず息を飲む帝太郎。

（……似てる）

美紀には昔帝太郎が失ってしまったある人物にどことなく重なる部分があつて……一瞬その子がそこに居るかのような錯覚を覚えてしまった。

（でも……そんなはずない……）

彼女を失ったのはもう二十年以上前の話……。だから眼前の少女とは年齢が噛み合わない。

そう思い直してよく見れば、やっぱり別人。

たまたま美紀と、自分の知る少女とが身にまとうオーラが似ていたからちよつと戸惑つてしまっただけ。この子とあの子は同一人物じゃない。

気を取り直して微笑むと、帝太郎は他の子供達を菜奈子と玉郎に任せ、相沢親子を奥にある小部屋——応接室——に通した。

「昨日はどうもすみませんでした！」

娘の頭を半ば強引に押さえるようにして、自分も深々と頭を下げると、圭吾は開口一番そう謝罪した。

「あ、いえ、お気になさらず……ッ」

頭を下げられる事に慣れていない帝太郎は、しどろもどろの口調で二人に頭を上げてくれるよう促す。

圭吾が頭を上げたのと、ドアがノックされたのが殆ど同時。

帝太郎の、「どうぞ」の声に、コーヒーとココアをトレイに載せて、菜奈子が部屋に入ってくる。

圭吾の前にコーヒー、帝太郎と美紀の前にココアを置くと、お辞

儀をして退室する。

普通こういった場合、大人にはコーヒーが出されるものだが、帝太郎はあの苦さがどうも好きになれない。だから今、帝太郎の前にココアが置かれているのは単に彼への配慮に過ぎないのだが、少し場違いな飲み物の登場に、室内の空気が若干和む。

しばし、カップから立ち上る湯気を見詰めていた圭吾が、意を決したように口を開いた。

「実は私、来週から五日ばかり出張を控えておりまして……」

「はあ……」

「それで……」

そこでちらりと自分の傍らで不貞腐れたようにそつぽを向いている娘を見遣る。

「今までは美紀が嫌がりましたので不安に思いながらも家で一人留守番をさせていたんです。……でも……」

「五日も家を空けなければならぬ、となるとさすがにご心配になられた？」

こちららも美紀の方に視線を注ぎながら帝太郎が言葉を紡ぐ。

四歳にしては少し大人びた雰囲気の子は、ショートカットがよく似合う、可愛らしい女の子だった。

将来は恐らく美人になるだろう、整った顔立ち。それ故に、つんとしていると子供ながらどこか近付き難いオーラが漂う。そう言えば自分の知る少女もこんなオーラを持つ子だった。

「お察しの通りです」

今の美紀の様子を見てみると、昨日、ここへ来る直前になってこの子が行方をくらませてしまったというのが何となく理解出来る。

実は帝太郎も、昨日は彼女の搜索に一役買わされた一人なのである。

美紀と帝太郎が知る女の子は、外見が似ているわけではなかった。過日彼女の搜索時に写真を見せられても何とも思わなかった。美紀がこの調子だったから、圭吾は事前にその事を帝太郎に相談

したかったのだ。

お預けの電話をする際に、とりあえずお話を……と告げた胸の内を告白する圭吾。

十時過ぎになって慌てふためきながらここへ飛び込んできた圭吾を思い出して、無意識の内に苦笑する帝太郎。

まるでお前のようだったと、後に玉郎が揶揄した程に、スーツを乱れさせていた圭吾。

この父親が娘を見失って如何に狼狽したのかが容易に推察出来た。豆まきに鬼がいなくちゃ話にならんという理由で、菜奈子と玉郎に託児所を任せ、圭吾と一緒に町中を走り回った帝太郎だったが、美紀は夕刻になると何食わぬ顔でふらりと帰宅したのだと言う。

その後、彼女が父親から散々お説教を食らわされたのは想像に難くない。

「あの……それで、大変申し上げにくいのですが……。その、改めて美紀をお願い出来ませんでしょうか？」

携帯に残っていた着信履歴に、すぐる様な思いでここへ駆け込んだ。頭の隅ではお門違いだと分かっていたけれど、他に頼れるところを思いつけなかったから。そう言っ頭を下げた圭吾に、帝太郎は黙ってただ、うなずいた。

警察へ……というのが咄嗟に頭に浮かばない程に、彼は動揺していたのだろ。無論、行方不明になってから高々数時間で警察に駆け込む、というのもどうかとは思うのだが――。

圭吾は、一度も預けた事のない子を必死になって一緒に探してくれた帝太郎に、少なからず好感を抱いたらしい。

おずおずとそう切り出すと、伺うように帝太郎を見遣った。

「美紀ちゃんさえ良かったら喜んで」

基本的にどんな子でも帝太郎にとっては天使。ましてや自分の大切だった女の子に面影が似ている少女である。圭吾の申し出を断る理由なんてどこにもない。

「それじゃあ！」

途端、今までどこか不安げであつた圭吾の顔が一気に明るくなる。本当に美紀の事が心配で仕方がなかったのだらう。

考えてみれば、昨日圭吾は会社を休んで美紀を探したのだ。そんな彼が、娘の事を思っていないはずがない。

「美紀、ほら、先生にご挨拶して」

「……」

昨日父親に嫌と言う程どやされたので、文句こそ口にしないが、美紀にとってここで帝太郎に挨拶をする事は完全なる敗北を意味していた。

だから二枚貝のように口をつぐんで、形ばかりの抵抗を試みたのだ。

「美紀！」

その態度に、圭吾が声を荒げるのを、帝太郎が片手で制した。それから小さく首を横に振って、彼女を怒らないで下さいと言外に含ませる。

「美紀ちゃんの事はお任せ下さい。僕達が責任を持ってお預かり致します」

そう言つてにつこり微笑むと、部屋の戸を開け、圭吾にやんわりと退出を促す。

「……それではお願いします……」

どこか不安げな表情で、スーツ姿が『つくしんぼクラブ』を出て行く。

後には一口も口をつけられなかったコーヒーが残された。

「さ、美紀ちゃん、あっちの部屋に行こ？」

圭吾が出て行ったのを確認すると、おいでおいでをしてみんなが遊ぶプレイルームへと誘う帝太郎。

その言葉が聞こえているのかいないのか、無言で机の上を見詰める美紀に

「それともココア飲んでからにする？」

のほほんとした口調でそう問いかける。

途端、

「あたし、別に誰かにお世話してもらわなくても平気だもん！」

吐き捨てるように美紀が叫んだ。

父親が居なくなつた事で、思いのたけをぶつけられるようになったらしい。

その声に、子供達と楽しそうに遊んでいた菜奈子と玉郎が、一瞬ぎよつとしたように動きを止める。

大丈夫だよ、というニュアンスをこめて二人に微笑むと、帝太郎は部屋の戸を再び閉めた。

（この子はこう言う所も君にそっくりだね……）

自分の知る子と言動がそっくりな美紀。扱いは慣れている。

帝太郎は美紀にそつと近付くと、彼女の前にしゃがみ込んで柔らかな声で話しかける。

「うん。僕も美紀ちゃんの事、お世話しようなんて思つてないよ？」

「え？」

「実はね、ここだけの話、僕、美紀ちゃんにお願いしたい事があるんだ」

「お願い？」

「そつ。お願い。ほら、ここには沢山小さい子達がいるでしょう？」

そこで振り返つて戸の方を指差す。

扉を閉めていてもなお、子供達の弾むようなはしゃぎ声が聞こえてくる。

ここに預けられる子供達の大半が、美紀より年端の行かぬ幼子達ばかりなのだ。

「うん」

「でね、正直なところ、僕達だけじゃ大変なんだよね。だからね、美紀ちゃんにもお手伝いしてもらえると、すつごく助かるなあなんて」

「お手伝い？」

「そう。あ、でもパパには内緒だよ？　頼りないって怒られちゃうから」

「うん！　約束してあげる！」

人差し指を口にあてがって内緒のポーズをとる帝太郎に、美紀が満面の笑みでそう答える。

指きりげんまんで交渉成立。

「あ。そうだ！　先生良い人みたいだからパパにも言わなかった事、教えてあげるね。昨日、あたし見たの。赤いまだら模様の着物を着た女の人がね、何か言いながらフラフラ歩いてたの！」

本当は父親を困らせてやろうと、家に帰らないつもりでいたのだと美紀は言う。

自分と年の近い、見慣れぬ少女と連れ立って歩くその女を、薄気味悪く思いながらも目が離せなくなってしまったのだと語る美紀。

あの女の子は大丈夫なのかしら？　そんなことを思いながら見るとはなしに少女を見つめていたら、件の女と目が合ってしまった。

その途端、女に笑い掛けられたのだそう。

「その顔がすごく怖くって」

それで、一目散に家に駆け戻ったらしい。

女の子ともちよつとだけ目が合ったんだけど……。そこまで言うて束の間言いよどむと、「その子、びしょ濡れだったの……」

どこか悲痛な面差しをしてそう付け加える美紀。

冬の寒空の下、半そで姿で濡れそぼったその女の子は、どんなに寒い思いをしているんだろう。そう思うととっても悲しくなってしまったのだと美紀は言う。

その言葉に、帝太郎の表情が一瞬強張る。

その顔からは、いつものもののほほんとした春風のおいは感じられなかった――。

『はい、二条院です』

電話から聞こえてきた声音に、ホッと安堵の溜め息を漏らす帝太郎。
『電話から聞こえてきた声音に、ホッと安堵の溜め息を漏らす帝太郎。』

「佐太郎……だよな？」

『……？　もしかして……兄さん？』

「うん、……久しぶり」

受話器の向こうで弟が息を飲む気配が伝わってくる。

無理もない。

帝太郎の方から実家に電話をかけるのは、実に七年ぶりなのだから。

「父さんが電話に出たら切っちゃおうって思ってたんだ。佐太が出てくれてホント良かった」

何だか父親と話をするのが気まずくて、家出をしたわけでもないのに疎遠になってしまっている実家。

時折母親から他愛のない電話がかかってくるが、それも帝太郎の事を気遣ってか、父のいない時を選んでいるらしく、ここ十数年、電話で父親の声は聞いていない。

もしかすると、父は母の隣に黙して座っているのかも知れないが、表立って受話器を握る事がないので、帝太郎としては助かっている。

「父さん達は？」

『ちよつと出かけてる』

佐太郎の声にホッと一息つく、帝太郎は少しトーンを落として話し始める。

「実はさ、佐太郎に内密な願いがあるんだ」

帝太郎の声にしばらく耳を傾けていた佐太郎が、

『それ、直接父さんに頼んだ方がいいんじゃない？』

事もなげにそう告げた。

それは予想していた言葉ではあったけれど、そう出来るのなら最初から佐太郎には言わないわけで――。

「だからね、それが出来たら苦労しないんだって。僕、佐太みたいに良い息子してない分、後ろめたさありまくりなんだよ。それにね、この件に関しては父さんが首を縦に振らないの、分かってるんだ……」

そう。

“あの事件”以来、帝太郎は御霊屋^{みたまや}への立ち入りを禁止されてしまっているのだから。

まるでそこへ帝太郎達が立ち入った事実すらなかったとでも言う風に、二条院家ではその事件自体が隠蔽されてしまっている。

気がつくと、白くなるほど強く下唇を噛んでいた。

「もしもし？ おーい、兄さん、聞いてる？」

佐太郎の呼びかけにハッと我に返る帝太郎。

「……ごめん、聞いてるよ」

「あのさ、何を思って俺にそんな事を頼んできたんだか分からないんだけど……父さんが許さない事なら尚更俺なんかがどうこうしちゃマズインじゃないの？」

佐太郎の言う事ももつともだと思う。

思いはするのだけれど――。

そこで困ったようにプレイルームの方を見遣る。

その日も、九時を過ぎた辺りから、『つくしんぼクラブ』の中は子供達でひしめきあっていた。

玉郎と菜奈子にそちらを任せて、一人デスクについて受話器を握っていた帝太郎だったが、今すぐあちらへ加わってしまいたいような、そんな衝動に駆られる。

そう思ったからか、自然、意識が子供達の方へと集中してしまつて――。

「あーっ！ 直樹君、ストープに触っちゃダメーッ！」

通話口を覆う事も忘れて大声を上げてしまった。

『兄さん、耳、痛いよ』

途端、電話の相手から溜め息交じりの非難を浴びてしまう。

「ご、ごめん」

相手には見えもしないのに、思わず頭を下げてしまうのはよくある事だ。

電話に向かって何度もお辞儀をしている帝太郎の姿を見て、玉郎が溜め息をつく。

『ったく、俺なんかより兄さんの方が才能に恵まれてるだなんて、どう考えても理不尽だよ』

口を尖らせている姿が目には浮かんできそうな、佐太郎の声。

帝太郎の血筋である二条院家の者は、皆一応にある種的能力を持つてこの世に生を受ける。それは魔を打ち破る破魔の力であったり、自らと、その周囲の人々を見えない敵から守る防御結界の力であったり……と、とにかく個々人によって様々に得意分野が分かれるのだ。しかし、その中であつてごく稀に、あらゆる能力に秀でた才を持つものが現れる事も忘れてはならない。

この、のほほんとした面構えの帝太郎が、実はそれだったりするのだが、イマイチ信憑性に欠けた事柄だというのも事実である。

「まあそう固い事言わないでよ、佐太郎ちゃんさたろう。佐太ちゃんれいばくだつて靈縛の能力に関しては右に出る人いないんだし」

靈縛——。即ち、靈を縛る能力の事。

『兄さん以外にはね』

どうやら佐太郎、今日は虫の居所が悪いらしい。

困ったなあ……と呟きながら頭をかく帝太郎に、今まで彼の様子を遠巻きに伺っていた玉郎が、足音を轟かせながら大股で歩み寄る。
「貸せ！」

帝太郎から半ば強引に受話器を奪い取ると、

「悠長に兄弟喧嘩してる場合じゃねえんだよ、このアホが！ ったく、今更言つまでもねえだろーけど、一応お前の兄貴は玉封師ぎよくふうしなん

だよ、俺の主人あるじのな！ その玉封師様がわざわざしたくもない電話まで掛けてんだ。いい加減事の重大さを察しやがれっ！」

珍しく恐ろしい剣幕で怒鳴り散らした。

普段から言葉遣いの綺麗な方ではない玉郎だが、ここ『つくしんぼクラブ』でこんな態度をとった事は一度もない。

「玉ちゃんセンス、こわーい！」

日頃の「どうした？ さあ来い、チビども！」調の玉郎とは全く違った雰囲気、子供達にわかにあちらこちらで泣き始めてしまう。

「わあ〜！ な、泣くな！ 俺が悪かった、な？ そ、そーだ！ 泣き止んだらお馬さんしてやるぞ〜？」

途端、この変貌振りなのだから、帝太郎でなくとも吹き出してしまふ。

「あ！ こら、テメエ、笑いやがったな！？」

子供達の間を右往左往して走り回りながら、玉郎がクレームをつける。

その様子を見て、菜奈子が隅っこの方でクスクス笑っているのだが、そちらにまでは気が回らないらしい。

「もしもし？ ごめん、佐太ちゃん。ちょっと今、トラブっちゃって」

玉郎の言葉を、電話での会話で誤魔化す帝太郎に、

『今のつて兄さんトコの玉封じの鬼？』

きょとんとした顔が浮かんできそうな、空ろな声音で佐太郎が返す。

「え？ うん、そうだけど……？」

『やっぱ、迫力あるね〜。いいな！。俺も早く玉封じの鬼、欲しいなあー』

心底うらやましそうな口調である。

「……鬼なんて……。お前まであんな目に遭ったりしたら……」

『え？』

「あ、いや、何でもないよ、うん！」

『変な兄さん。ま、いいや。で、さっきの話なんだけど……』

「ん？」

『一度だけだからね？』

協力してくれるという佐太郎の言葉に、帝太郎の表情が明るくなつた――。

そこは山間^{やまあい}の静かな村である。

春になれば驚^{つぐみ}の美しい囀^{なみず}りが聞こえ、夏には辺り一面が蝉^{せみ}の声に包まれる。

秋に周囲の山々が赤く色付く光景は壮観だし、冬になれば雲上ではないかと見紛う程に村全体が純白の世界へとその身を転ずる。

「佐太郎、今の電話、帝太郎からか？」

今時珍しい、ダイヤル式の黒電話。その受話器を置いたと同時にそんな言葉が背後から投げ掛けられる。

「帰ってらしたんですか、父さん」

少し目を細めながら父を見遣る。振り返り様に見た父は、障子を背にしている佐太郎からは丁度逆光の形になっていたのだ。

「ああ、ついさっき、な」

「そうですか……」

年の頃は五十代後半だろうか。

和の装いの、堅牢そうな男。帝太郎と同じように首から小さな巾着袋を下げているのが印象的だ。

「帝太郎からか？」

息子に向かい、再度同じ問いを口にする。決して強い口調ではないのだが、その言葉には絶対に逆らえそうもない、どこか威圧感のある声。

「ええ、兄さんからです」

余りの眩しさに眼鏡を外しながらそう告げると、佐太郎は思い出

したように付け加えた。

「あと、兄さんが従えている玉封じの鬼と少し」

「ほお。で？」

視線を心持ち胸前の巾着に注ぎながら男が問い掛ける。

「……父さんのものより何だか人間味がありました」

この辺り、佐太郎は嘘がない。思ったままを実直に口にするので聞いている方は快い。

「そうか。わしのものよりも人間臭いか」

そう呟く声音がどこか寂しげに聞こえたのは、錯覚だろうか。

いつも冷徹な父の様子に慣れている佐太郎が、思わず息を吞んでしまったのはそのためだ。

「……帝太郎、その甘さがお前にとって命取りになり兼ねんという事が分かっておるのか……？」

ぼそりと呟かれたその台詞は、近くに立つ佐太郎の耳にすら届かなかった。

「ねえ、玉ちゃん^{たま}。僕さ、今週末に一度、実家に帰ってみようかと思ってるんだ……」

ここは六畳一間のおんぼろアパート。

キッチンに立つ玉郎^{きょくろう}の後ろ姿をこたつに座してぼんやりと眺めながら、帝太郎が唐突にそう告げる。

「実家？」

「うん」

卓上には冬らしく、籠に入ったミカンが置かれている。それに手を伸ばして入れ物ごと自分の傍に引き寄せると、帝太郎はその中の一つを手にとった。

「日帰りで？」

「うん、そのつもり……。でも……もしかしたら泊まりになるかも……」

ミカンを頬張りながら帝太郎が返す。

「こつち、留守にして平気なのか？」

「この土曜は託児所お休みの日だし、何かあったとしても玉ちゃんと菜奈ちゃんが居てくれれば大丈夫かなあ……なんて」

のほほんと告げられた帝太郎の台詞に、玉郎が包丁を手にしたまま、振り返る。

「やつぱり不安？」

眉根を寄せ、上目遣いで玉郎を見遣る。

「お前、まさか俺を置いていく気じゃ……」

不安かどうかという問いには答えず、そう尋ねた玉郎に、帝太郎が静かに頷く。

玉封師^{ぎょくふうし}が玉封じの鬼と行動を別にする事は、断じてあってはならない。

玉封じの鬼は主人の胸前にある玉からその鼓動を感じ取り、それ

がそのままその鬼の人格形成へと繋がっていくからだ。

加えて玉封じの鬼は二十四時間以上己が入るべき玉との接触を断つ事は出来ない。そんな事をしようものなら存在自体が消えてしまうのだ。

以前、玉郎がそんな風に話してくれたのを思い出す。

本来ならば玉封師の長である父から教わるべき事項なのだが、ギクシャクとした関係の中で、ついに聞かず終いになってしまった。

「僕、こう見えても玉ちゃんの事、信用してるんだ。ほんのちょっと離れてたくらいで変わったたりしないでしょ？」

玉郎がここに残るといふ事は、必然的に玉も帝太郎を離れてこの場に残るといふ事で――。

「僕がいけない間はバスとか乗ってもいいから。そういう交換条件じゃ、駄目？」

「そういう問題じゃねえ！」

言葉と同時に勢いよく振られた玉郎の手から、包丁がすっぽ抜けて飛ぶ。

「わあ！！」

とつさにミカンの入った籠を盾にした帝太郎だったが、それに包丁が深々と突き刺さっているのを理解した途端、音を立てて血の気が引いていくのを感じずにはおられなかった。

「……た、玉ちゃん、前言撤回。やっぱ一緒に行く……」

そんなこんなで帝太郎の里帰りは、玉郎も一緒、という事になった。

帝太郎が住んでいる所と、実家とは在来線を乗り継いで三十分余りという距離にある。

実のところ駅を降りてからのほうが長い道のリになったりするのだが、そのお陰で近い割に両親との間に一線を引いて生活が出来ているというのも事実だ。

「寒っ！」

電車を降りると同時に冷たい風に吹き付けられて、思わずコートの前を合わせる帝太郎。

一人だけで寒い思いをするのは悔しいので、トイレに入って玉郎を玉から呼び出す。

「もうちつとマトモなトコで呼び出せねえのか」

出てきた途端、薄暗いトイレでは文句の一つも言いたくなるというもの。

例によって公共機関の乗り物は、玉の中で過ごした玉郎であったが、その上こんなところで呼び出されたのではたまったものではない。

そんな玉郎の愚痴を半分も聞かないうちに、帝太郎は駅舎に向かって歩き出す。

旅行に来たわけではないので、荷物はそんなに多くはない。せいぜい下着の替えとお金があればこと足りる。万が一何か不備があったとしても、そこはそれ、実家のよしみで何とかなるだろう。

現に、前を歩く帝太郎が提げたショルダーバッグには、着替えなどよりもお菓子のほうが多く入っているという有様である。

駅舎に入ると、達磨ストーブが焚かれていて、空気がほんわか暖かい。

辺鄙な田舎の駅だ。かろうじて駅員が一人いること自体奇跡に思えるそこには、帝太郎たちのほかに客の姿はなく閑散としていた。

駅舎に入るなりストーブの真ん前に陣取って鞆の中を物色し始めた帝太郎が、につこり笑って甘露飴の袋を取り出す。

早速一つ頬張ってから

「玉ちゃんも食べる？」

そう言つて玉郎に微笑みかける。

「いらねえよ」

帝太郎の、この緊張感のなさは何なのだろうか。

託児所での遠足気分さながらなのほんとした主人の様子に、玉郎は力ない溜め息を落とす。

「玉ちゃん、疲れた時は甘い物に限るって、はい、甘露飴♪」

溜め息をついたのがまづかった。

如何にもしてやつたりと言った表情で帝太郎が飴を差し出す。彼は何としても自分にそれを食べさせたいらしい。こうなると帝太郎は意固地だ。

諦めた玉郎が渋々手を出すと、待つてましたとばかりに大きな飴玉が一つ、掌の上に。

何の気なしにそれを頬張った……と同時に帝太郎が爆笑し始めたものだから思わず息を吞んでしまった玉郎である。

「……？」

解^げせない、といった面貌で帝太郎のほうを見遣ると、

「玉ちゃん、共食いだね。飴玉食べちゃうんだもん！」

最早怒鳴る気も起きない。

「下らねえこと言つてないで行くぞ」

「待つてよ、玉ちゃあゝん！　ここで待つてたら佐太が迎えに来てくれることになってるんだってばあ！」

無造作に荷物を引つ掴むと、帝太郎は慌てて玉郎の後を追った。

「兄さん……？」

駅舎を出たと同時に困惑したような声が掛かる。

見れば歩道脇に路上駐車された車から、佐太郎が降りてくるとこ

るだった。

車種は黒のフォレスタ―。

「佐太郎」

数ヶ月ぶりに目にする弟の元気そうな姿に、帝太郎が兄らしい優しい笑みを浮かべる。

「久しぶりだね。元気にしてた？」

少し前に電話でも同じことを聞かれた気がするが、兄はそれ以外に掛ける言葉を思い付けないのだろう。

「それだけ取り柄だから」

そう帝太郎に答えながらも、視線は専ら玉郎に向いてしまう。

「兄さん、もしかしていつも彼をそんな風に？」

佐太郎の知る限りにおいて、父は必要な時以外に玉封じの鬼を解放していることはない。

鬼を野放しにしておくことはそれなりのリスクを伴うからだろうと佐太郎なりに理解していたつもりだ。

それなのに――。

「うん。そうしなきゃ機嫌悪いんだもん。玉ちゃんが封じの玉に入るのは夜の間くらいだよ。ね？」

「言わせてもらうがさっきまで俺は玉人中だった……」

「公共の乗り物に乗る時は別だつてば。玉ちゃん外に出てたら二人分の運賃がかつちゃうんだもん！」

自分が問うたものとはどこかずれた会話が展開されている。

眼前の二人の様子に佐太郎は大きな溜め息をつくと、

「とりあえずこんなところで立ち話も何だし、家に向かわない？」

半ば諦めた様子でそう告げた。

鹿路ろくろという地名で呼ばれるその部落は、電車を降りてからは、自動車で離合出来るか出来ないかの狭い山道を延々一時間余りかけて上って行かねばならない。

普通に考えればこんなに不便な道、そこに暮らす誰かから苦情が出て、少しはマシになるはずなのだが、この部落には二条院家にじょういんに縁ゆかりのある者しか暮らしていないためか、誰一人不平を言う者はいなかった。いや、むしろ陸の孤島となることを望んでさえいるのかも知れない。

世帯数は部落全体で十もなく、住人自体も十数名しか暮らしていない、絶滅寸前の集落。

ここもかつては五十世帯以上が生活していたとのもので、荒れるに任せた感の漂う空き家や、石垣のみが残る民家跡が、帝太郎の生家である二条院家を中心に放射線状に広がっている。

道は一応舗装されてはいるものの、山頂に着くまで途中に民家はなく、一瞬どこにしているのか分からなくなってしまうようになる。

所々に見られる苔こけむしたガードレールと、カーブに差し掛かるたびに登場する古びてくすんだカーブミラーの存在がなかったら、文明から取り残された気分になり兼ねない。

山の中腹辺りから、道の脇にちらほらと雪の積もった部分が増え始め、鹿路に着く頃には辺り一面薄っすらと銀世界に包まれていた。同じ市内でも、山を登るということはこれほどまでに違うものなのかと帝太郎は今更ながら実感した。

「変わらないね。この家も」

家に着いてすぐ、帝太郎の第一声はこれだった。

たかだか数ヶ月で変われ、と言うほうが無理なのだが、面倒なので誰も追及しない。

「ところで父さんたちは？」

田舎の家らしく、屋根は茅葺^{かやぶき}。大層なことに土間なんて物も存在している。使わなくなつて久しい埃まみれのかまどだつて、手入れをすればまだまだ現役で活躍可能だ。

「今、ちよつと出てる」

「ふん」

佐太郎^{さたろう}の返答を聞いてもまだ不安なのか、キョロキョロと辺りを見回していた帝太郎の目が、ある一点でふと止まる。

「ね、まだあれで暖とつてるの？」

帝太郎が指差したのは部屋の真ん中にある掘りごたつだ。

「え？ うん、そうだけど？」

「一酸化炭素中毒には気を付けてね。本当、怖いんだよ？」
帝太郎の言葉はいつだつてどこかしらピント惚けしている。

この家に戻つて来なければならなかった理由を思えば、彼のこのほほんとした態度は余りにも不可解だ。

血の繋がった実の兄とはいえ、佐太郎が帝太郎と共に過ごした期間は年数にしてほんの六年余りしかない。佐太郎が彼の毒気に当てられて呆然としてしまったのは、当然と言えた。

既に靴を脱いでちゃっかり居間のほうにまで上がり込んでしまつている帝太郎とは対照的に、佐太郎は未だ土間に突つ立ったまんまだ。

「おい、お前……」

そんな彼に背後からつつけんどんな声が掛かる。

「あいつの言動にいちいち振り回されてるようじゃ、この先身体がいくつあつても持たねえぜ？」

声の主は言わずと知れた玉郎^{たまろう}である。予想外の人物からの言葉に、佐太郎がハツとして振り返る。

間近で見る鬼の顔に一瞬、ギョツとしたが、告げられた台詞の意味を考えてみると、口調はともかくとして、この鬼が自分のことを気

遣つてくれていることが分かる。

「う……うん」

何だか拍子抜けしてしまった。

幼い頃からイメージしてきた玉封じの鬼なるものが、音を立てて崩壊してしまいそうだ。

（本当、父さんのとは違うなあ）

父のものをそんなに度々目にしたことがあるわけではないが、明らかに眼前の鬼とは性質を異^{こと}にしていたように思う。

父のそれは、もっとこう冷たくて、触ると凍り付いてしまいそうな感じだったはずだ。

「どうかしたのか？」

気がつくと、ぼんやりと玉郎を凝視してしまっていた。

「あ、いや、何でも……」

必要以上に大袈裟な様子で首を横に振ると、佐太郎はぎくしゃくとした足取りで帝太郎の後を追う。

「兄さん、何してるの？」

掘りごたつの布団をはぐって一生懸命を覗いているらしい帝太郎に、恐る恐る声を掛ける。

「……いや、久し振りだったから何となく懐かしくって」

（掘りごたつの中が！？）

一瞬そんな風に思ってしまった佐太郎であったが、ついさつき玉郎に言われたことを思い出して、深くは考えまいと自分に言い聞かせる。

「佐太はしなかった？」

「え？」

「隠れん坊」

いきなり何を言い出すのやら。

きょとんとした顔つきで兄を見詰める佐太郎の眼差しに、帝太郎が慌てて付け加えをする。

「佐太は小さい頃この中に隠れたりしなかったのかなあ？って」

帝太郎の言わんとしていることがやつと理解出来た。

「……やろうにも、相手がいなかったし……」

何の気なしに発したつもりだったが、帝太郎には自分の声が寂しげに聞こえたらしい。

申し訳なさそうな表情をすると

「ごめんね、佐太。僕がもっと遊んであげれば良かったね」

そう告げてうつむいた。

正直なところ、兄は自分ともっと遊びたかったんだろうと思う。

しかし、兄の心の中には自分の知らないトラウマが存在していて、それが無意識のうちに佐太郎を遠ざけている。

それが何なのかは分からないけれど――。

「ところでさ、例のやつ、うまくいった？」

「……うん、一応。でもさ、兄さん、あんなトコに入るなんて……本気なの？」

先日電話越しに帝太郎に頼まれたこと。

それは家の離れに位置する、ある建物の合鍵を作っておくことだった。

「もちろん！ そのために来たんだもの」

ことの重大さを分かっているのかいないのか。春風^{しゅんぷう}駘^{だいてい}蕩^{とう}たる声音で告げる帝太郎の様子からは、緊張感なんて微塵も感じ取れない。

（平常心、平常心……）

そう自己暗示を掛ける佐太郎を、土間のほうから玉郎が笑いを必死に堪えながら見守る。

「はい、これ」

佐太郎から手渡された鍵をそそくさとポケットに仕舞い込むと、

「玉ちゃん、行くよ」

帝太郎がにつこり笑ってそう告げる。

「あ。俺も……！」

「佐太は駄目」

口調は極めて穏やかなのだが、その声は絶対の拒絶を含んでいる。こう言うところがやはり親子なんだろう。父親のそれとよく似た兄の物言いに、佐太郎は諦めたようにうなずいた。

「じゃ、いい子にしてるんだよ？　もし父さんたちが帰って来たら、出来るだけ時間稼ぎヨロシクね」

帝太郎は自分のことを一体何歳だと思っているのだろうか？

今の言葉には複雑な思いのした佐太郎である。

鬼と共に家を出て行く兄の後ろ姿を見送りながら、佐太郎は深い深い吐息を漏らした。

思念というものが、明確なるかたちをもってひしひしと伝わってくるのが可能ならば、この中の空気は正にそれだ。

「相変わらず凄えな、この気……」

こめかみの辺りを押さえながら玉郎がつぶやく。

これだけの念だ。仮にも玉封師として玉封じの鬼を従えている帝太郎が何も感じないはずはない。

「帝太郎……？」

いつもなら自分が一言えば十返ってくるほど勢いのある帝太郎が、今は石のように黙りこくっている。その様にうそ寒いような心地がして、玉郎は無意識のうちに生唾を呑み込んだ。

「……ここに来ると思ひ出すことがあるんだ」

寺の本堂を思わせる造りを持つ堂内で、帝太郎が独り言のように話し始める。

床一面に鈍い光をもたらしているのは、帝太郎がその首から下げた巾着の中に入っている玉と同じモノなのではあるまいか。

「僕は小さい頃、ここがとても好きだった……」

ビー玉によって満たされたような堂内。

それをぼんやりと照らし出すように、一定の間隔を置いて蠟燭が灯されている。

星空に迷い込んだような、どこか幻想的なその雰囲気、子供の

心を捉えたからと言って、一体誰が意義を唱えられよう？

玉郎も、帝太郎が幼い頃のこととは、断片的にはあるが記憶している。

帝太郎は、自分が玉の中からずっと見守ってきた主人^{あるじ}なのだから。それ故、彼が言わんとしていることが分かってしまつて、玉郎には辛かつた。

「聞いてくれる？ 玉ちゃん。僕がこの家を出た理由……」

「瑠璃、子供たちの姿が見当たらんようだが」

薄暗い部屋の中から、逞しい体躯の男が姿を現す。落ち着いた声音に見合う、厳格な面持ちの美丈夫だった。

声が発せられるまで彼の気配が感じられなかったのは、何も勝色かちいろの単姿ひとえすがたのためばかりではないだろう。

三十代そこそことは思えない重厚な雰囲気を帯びた彼の胸元には、首からさげた小さな巾着袋。着物との色合を考えてか、黒の生地で作られたそれは、違和感なく単ひとえに馴染なじんでいる。

この男こそが現二条院家の長、隆親たかちかである。

縁側に佇む女性に近付きながらそう告げると、雨に煙る庭の一角を見つめていた視線がゆっくりと振り返った。

海老茶色えびぢやの小紋姿のよく似合うその人は、艶やかな黒髪を日本髪に結び上げていた。それが少しほつれたようにうなじを流れる様も、どことなく彼女を色めかせている。年の頃は二十代半ばといったところ。

「あら、そういえば……」

今気付いたというようにおっとり微笑む。

「……気付いていなかったのか？」

「……ええ。もう半時ばかりぼんやりと紫陽花あじさいを眺めていたものですから」

のほほんとした口調に、いつものことながらいささか脱力してしまった隆親である。

「帝太郎ももう六つですし、妹の面倒くらい一人で見られますわ」「そうだな」

穏やかに告げられた言葉に、思わずうなずいてしまう。

いつも自分のほうがしっかりしているつもりで、瑠璃ののんびりとした雰囲気を支えられている気がする。

「……だがな、それにしたって彩音^{あやね}は女の子だ。いつまでもあの調子では困りものだろう？」

雨のせいとか、縁側の天井でさえ薄暗い。それを仰ぎ見るようにして、隆親が溜め息混じりに呟く。

「あの子のお転婆は私譲りですもの。もう二、三年もすれば自然と落ち着きます」

柔和な笑みを浮かべる瑠璃に、隆親が眉根を寄せて呟く。

「お前似だから二、三年では落ち着かんのでは？と心配しているんだ……」

好きな異性でも出来て、その男に女性らしく見られたいと思わない限りは。

幼い頃の妻によく似た娘の性格を思うと、先が思い遣られてならない隆親である。

梅雨の長雨に煽られて、気分が一層滅入ってしまう。

庭の片隅で咲き誇る紫陽花を見つめながら、隆親は深い深い溜め息を漏らした――。

「おにいちゃん、彩音、もうぬれるのヤだ」

家の裏手の山で懸命に秘密基地の補強に興じていた帝太郎は、妹の言葉に泥だらけになった手を止めた。

「……彩音、傘は？」

あれだけ傘をさしておくんだよ、と念を押しておいたのに――。

振り返り様に見た妹の手には、何も握られていなかった。

「彩音もおてつだいだいたかったんだもん！」

なるほど、帝太郎の背後――つまり秘密基地の正面に当たるところ――に、その辺の草やら石やらが塚のようにこんもりと盛られている。玄関先のオブジェといったつもりだろうか。

子供というのは、一つのことになると、何かしら別のことをおろそかにしてしまう生き物である。

彩音も、その飾り作りに没頭する余り傘を投げ捨ててしまったの

だ。

はあくつと力ない溜め息をついた帝太郎であつたが、妹を責めようとは思わない。

実際、自分だつていい加減に傘をさして作業をしたから濡れ鼠になつてゐるわけで……。

身体に重く張り付いた衣服に、気分まで滅入つてしまふ。

「そろそろ帰ろつか？」

大事な妹に、風邪でもひかせてしまつてはことだ。

帝太郎がそう思つて優しく問いかけると、間髪入れずに抗議の聲が上がる。

「イヤ！ このまま帰つたらぜつたいにおこられちゃうもん！」

確かにその通り。

いつも温和な母はともかく、厳格な父と口うるさいお手伝いさんはそう簡単に許してはくれないだろう。

「少しだけどこかで乾かしてから帰つたほうがいいかな……」

絶え間なく雨粒を降り注がせる天空を仰ぎ見ながら呟く。

「彩音、いい場所おもいついた！」

「どこ？」

帝太郎の言葉に、彩音が瞳を輝かせながら提案する。

「お家のはなれにあるお堂！」

そこは帝太郎もよく知つてゐる。時々一人でこつそり忍び込んでゐるからだ。

「でもあそこは……」

入ると首にさげた巾着の玉が、何だか妙な感じになる。それが氣になつてつい何度も出入りしてしまつてゐるのだが、実のところ入つてはいけない、と両親から止められているのだ。

「彩音、おにいちゃんがあそこにはゐるの、みたことあるもん！」

ホントははいつちやダメなんですよ？」

「うつ……」

彩音には年の割におしゃまなところがある。当然口のほうもかな

り達者なわけで――。

帝太郎が言葉に詰まったのを見て取って、更なる追い討ちをかけた。

「今日、彩音をあそこにつれていってくれたら、パパたちにはナイショにしていあげる」

その言葉が、言外に含む意味を汲み取れない帝太郎ではない。

これ見よがしにはあゝっと大きく溜め息をつく、と、渋々うなずく。

「やったあ！ おにいちゃん、大スキ！」

満面の笑みを浮かべて飛びついてくる妹に、ただただ苦笑の帝太郎であった。

「わあ、すごーい！」

雨、と言うこともあって、堂内はいつもに増して暗かった。

そこここに灯された蠟燭の炎のお陰で真つ暗闇にはならず、済んでいるが、それにしたって明り取りのための窓もないのでは、目が慣れるまでが一苦労。

堂内に侵入して目が慣れてきたと同時に放たれた彩音の第一声がこれだった。

いつ入っても灯火が絶えていたことがないので、定期的に誰か――恐らく父だろう――が出入りしていることは間違いない。

「彩音、あちこち触っちゃ駄目だよ？」

炎が絶やされていない以上、表立って人が出入りしている気配はなくとも、ここは放置された空間ではない。

好奇心旺盛な妹が、何か壊すのではないかと内心気が気ではない帝太郎である。

このお堂、正面入口のところに、木製の大きな扁額へんがくが掛かっていて、そこに筆文字で「御霊屋みたまや」と書かれているのだが、如何せん子供である帝太郎たちには何と書かれているのやら皆目見当も付かない。

「どうしてこんな暗くてだあれもないようなトコに、こんなにい

「っぽいキレイな玉があるのかな？」

彩音には蠟燭の炎は目に入っていないようだ。彼女の興味はただひたすらに、床の上に転がった沢山の玉に注がれていた。

炎の揺らめく光を受けて鈍い光を浮かび上がらせるそれらの玉は、一体何なのだろう？ その一つ一つが、全て微妙に違った色合いをしていることも、帝太郎にとっては不思議なのだ。

何にせよ、堂内の床を所狭しと埋める、この玉の数は異様なものがある。

「分かんない。ね、彩音、やっぱり出よう？ もう十分でしょ？」
いつもと一緒。胸の辺りで妙な感じがする。巾着の中の玉が震えているのだ。

一人でここに入った時は、その振動の秘密が知りたくて、ついつい長居をしてしまう。でも、今日は別。彩音が一緒なのだ。

何だか嫌な予感がする。模糊とした胸騒ぎが広がって、帝太郎は一刻も早くここを出たいという衝動が抑えられなくなった。

「……今はいったばかりじゃん！ それに彩音の服、まだびしょびしょだよ？」

言いながら彩音が水を含んで重く貼り付いたスカートの裾を摘み上げて見せる。そうしてもらってもなく、床に出来た水滴の染みを見ればそんなこと、一目瞭然なのだ。

「いいから！ 怒られそうになったらお兄ちゃんがかばってあげる！ だから出よう！」

この吐き気をもよおす居心地の悪さに比べれば、びしょ濡れで帰って怒られるのなんて、大した問題じゃない。

普段、帝太郎がこんなに声を荒げることは滅多にない。彩音がどんなに我俣を言っても大抵のことは通してやるのだ。

「……おにいちゃん？」

相当険しい顔つきをしていたのだろう。恐る恐るそう呼び掛けながら、彩音が伺うように顔を覗き込んでくる。

「……ごめん、大声出して。でも……何だか嫌な感じがするんだ。」

だから——」

今までも、この直感のお陰でかなり助けられてきた。

帝太郎自身は気付いていなかったが、これこそが彼の類稀^{たくまれ}なる靈力の片鱗^{へんりん}、玉封師^{ぎよくふうし}としての資質に富んでいる証拠なのだ。裏を返せば、それに従わなければ何か良くないことが起こるのは必至ということ——。

「……やくそくだよ？」

「？」

「彩音が怒られそうになったらかばってくれるってやつ！ パパってば彩音にばかりうるさくするんだもん！」

それは、お転婆な彩音に、女の子らしくなって欲しいと願う隆親の親心だったりするのだが、彩音にとっては鬱陶しいだけのようだ。
「うん、約束する」

ふんっ！と鼻息も荒く言い捨てる彩音に、帝太郎が優しく微笑みかける。

「じゃ、行こうか」

そうと決まれば長居は無用。言うが早いか、妹に背を向けると帝太郎は出口に向かって歩き出した。

先刻、ここに侵入する際用いた入口は、実は「御霊屋」の扁額^{へんがく}のすぐ下のあの扉ではない。

家の敷地内にある建物であるとは言え、子供たちに「立入禁止」と言い聞かせている代物だ。いくら何でも施錠^{しでう}くらいしてある。

「ほら、彩音、何してるの？ 行くよ？」

堂内で鬼門に当たる方角——即ち艮^{ぎん}（東北）——側は、今まで帝太郎たちが居た場所よりも床が一段ばかり高くなっている。その壁に、祭壇らしきものがあった。

見れば、その祭壇の上にもいくつかの玉が安置されている。よく眺めてみると、そちらに置かれた玉のほうが、帝太郎の持っているそれと近いことが判る。

壇上には青、赤、黄、白、黒の五色の四手^{しで}からなる幣帛^{へいはく}が、玉と

並べて供えられていた。色はそれぞれに、青は木、赤は火、黄は土、白は金、黒は水を現す。――木火土金水、即ち陰陽五行の考え方で万物形成の五気とされているものだ。

父親から耳にたこが出来るくらいそんな話を聞かされた帝太郎でなくとも、この祭壇には一種異様な仰々しさを感じてしまう。

それを横目に見ながら、帝太郎は彩音に呼び掛けた。

彼らが入口として用いた通路は、その祭壇が設けられた壁面の、右隅の一角にある。正規の扉から入ると祭壇の死角になってほぼ分らない位置。

そこには、建物が古くなつたためにちょうど子供一人が通り抜けられるぐらいの隙間が出来ていた。壁板が緩んで、簡単に取り外せるようになっていたのだ。

堂内を、ぐるりと取り巻くように張り巡らされた注連縄しめなわには、人が三人連結したような形状の紙が沢山取り付けられている。これは魔の侵入を防ぐために用いられるヒナゴ幣へいと呼ばれるもののだが、子供の目には不気味な人形ひとがたにしか映らない。

気丈な性格の彩音だが、さすがに薄暗い堂内で、こんなものに囲まれていることを実感すると、一人にされるのが怖くなつたらしい。「おにいちゃん、まって！」

半ば悲鳴に近い声でそう叫ぶと、一目散に兄の背中を追った。

「きゃっ！」

途端、近くにあつた玉を踏んづけて転んでしまう。

「彩音!？」

驚いたのは帝太郎だ。

彩音の悲鳴と同時に、一瞬にして堂内全ての灯火が消し飛び、辺り一面闇に包まれたのだから!

視界を奪われた闇の中、四方よもを取り巻く注連縄が激しい音を立てて千切れ飛ぶ気配が伝わってくる。と、間もなく辺り一面に生臭い臭気が漂い始めた。

「彩音!」

叫ぶ声も、異様な空気に押し包まれてくぐもってしまふ。

「…………おにいちやつ…………！」

どこかで彩音が呼ぶ声が聞こえるが、その声はとても遠く、一体どこから発せられているものなのか、皆目見当もつかない。

その間にも周囲の空気は刻一刻と生臭さを増していく。

身体にまとわりつくようなねっとりとし生暖かいその臭気に、意識が遠のきそうになった時、帝太郎は自分の周りを見えない何かが覆い始めるのを感じた。

(…………玉…………?)

巾着の中から溢れてくるその“気”は、まるで帝太郎を守るかのように彼の周囲に見えない壁を作っていく。

帝太郎には分かる。

その結界が、微量な力しか有しておらず、自分の周りをカバーするので精一杯だということが。

「彩音…………っ！」

自分の周囲には防護壁が出来たけれど、妹のほうは——？

そう考えると居ても立つても居られなかった。

彩音を助けなければならぬ。

でもどうやって？

思いを巡らせている間にも、彩音の身には危険が迫っているかも知れないのに！

「どうすればいいんだよおっ！」

心の中の叫びを思わず口に出した時——。

——コンナ処^{トコロ}二隠レテオツタノカエ…………？

暗黒のどこかで、そんな声が^{こだま}訝した。

それから昏く^{くら}澱んだ静けさの中に、ペタリ…………ペタリ…………と、何かが素足で歩くような音が混ざり——。その音に、重いものを引きずるような音が重なっては闇の中に消えていく。

そんな音がしばし繰り返された後、

「おにい……………」

彩音の悲痛な声が堂内に響き、それを最後に、まるで何かに遮られたようにパツタリと全ての音が途絶えてしまった――。

「彩音……………っ!？」

しん…………と静まり返った堂内に、帝太郎は物凄く不安になる。無我夢中で結界を突き破ろうと足を踏み出した途端――。

全身に電撃が走ったような衝撃が伝わって、彼は意識を手放した。

「帝……」

虚ろな目をして語る主人の肩に、玉郎が思わず手を載せる。

「ねえ玉郎、彩音は本当に居たよね？」

「……」

問い掛けられた言葉に、玉郎は視線を逸らさずにはおられなかった。

「僕ね、あれから一週間以上眠り続けてしまったんだ」

床に転がった玉を無表情に見詰めながら、帝太郎が言葉を紡ぐ。

「でね、目を覚ました時、『彩音は！？』って訊いたら父さんたち、何て言っただと思う？」

「……」

「『彩音？ 誰のことだ？ 寝惚けて夢でも見てたんだろう』だって。馬鹿にしてるよね。確かに彩音は居たのに」

周囲の言葉が信じられなくて、帝太郎は身体がすっかり回復してからしばらくの間、家中をひっくり返して妹の存在を示すものはないかと探し回った。

近所の親戚連中にも、片っ端から訊いて歩いた。

でも、家からは彼女の写真一枚出てこず、近所からも誰一人として彩音のことを聞き出すことは出来なかった。

今思えば無理もない。

帝太郎の住んでいる部落は全世帯が二条院家の息のかかった家なのだから。

一週間以上も寝込んでいればその間に口裏を合わせるぐらい造作ないことだったのだろう。

もちろん、堂内だって調べようと頑張った。しかし、帝太郎がよく出入りしていたはずのあの入口は、壁板がしっかりと補修されていて中に入ることは出来なかったのだ。

「でもね、確かに彩音はいたんだ。だって……みんなにも隠しきれないことが一つだけあったんだから」

帝太郎の声に力がこもった。うつむいていて見えないが、もしかしたら彼は泣いているのかも知れない。

「あの日、彩音が作った秘密基地のオブジェ。雨で大分壊れていたけど、あれだけは消されずに残っていたんだから……」

それを見た時、帝太郎は確信したのだ。彩音は確かに存在していたのだと。

恐らく総ては次期二条院家の長となりうる自分を守るためになされたことなのだろう。家長である隆親の言うことは絶対なのだ。いくら悲しくても、母は彼の言葉に従う他なかったはずだ。

「僕はそんなにまでして庇って欲しくなかった……」
それから六年。

帝太郎が十二になった年、次男たる佐太郎が生まれた。

弟の誕生は帝太郎にとっても嬉しい出来事ではあったのだが、自分が下手に関わって彩音の時みたいないなことが起こるのは絶対に嫌だった。

「……僕は佐太郎に接するのを極力控えた。そして――」

「十八になった時、家を出た……」

おにいちゃん、おにいちゃん……と言っては自分の後について歩く弟に冷たく接することは帝太郎にとって至難の技だった。だから佐太郎が六歳の誕生日を迎えたと同時にこの家を後にしたのだ。

玉郎が発した言葉に無言でうなずくと、帝太郎は堂内をぐるりと見回した。

「僕がこの家に再び顔を出すようになったのは佐太が十八になってからだよ。そのくらい大きくなっていれば、もう兄としての僕を必要とすることはないだろうし。……それに」

玉封師などと言うものになる気なんてさらさらなかった帝太郎だが、彩音をあんな目に遭わせたモノを捕えたいという思いだけは、一度だって棄てたことはなかった。

二十歳の誕生日に玉封じの鬼たる玉郎と出会ったことで、その思いは確信に変わり――。

（何としても彩音を取り戻さねば）

それを成就させるためには術者――玉封師――としては先達である父ともう一度話し合う必要があったのだ。

「先日、美紀ちゃんが話してくれたモノが、もしも彩音を僕から奪ったのと同じ奴だとすれば……」

ここに足を運んでおくことは、後々何らかの助けとなるかも知れない。

「帝太郎、お前が察する通り、ここにはあん時のまんま残ってるモンが一つだけある。そして、そいつはお前が目的を達するためにや必要不可欠なんだと思う」

いつもの彼からは想像もつかないほど真剣な表情で語る帝太郎の様子に、玉郎が重い口調で語り始める。

「あれ、だ――」

そう言つて玉郎が指し示した先にあったものは、幼い頃によく見た、あの祭壇だ。

「祭……壇……？」

掠れたような帝太郎の声に、玉郎が無言でうなずく。

玉郎に促されるままに近付いてみた祭壇の上には、昔と変わらぬ様子で幾つかの玉が祭られていた。五色の四手しでからなる幣帛へいはくだつて自分が記憶しているまんまだ。

「これが……」

何か？と続けようとして、帝太郎はあることに気付いて息を呑んだ。

壇上に祭られている玉の数は全部で九つ。これは恐らく昔と変わっていないだろう。しかし、その九の玉に囲まれるようにして安置されている玉は自分の記憶の中には、ない。

他のものに比べてどす黒く見えるその玉は、真ん中のところからパツクリ割れてしまつていて――。

「これ……が……」

「二十六年前にお前の妹が封印を解いちゃった“封じの玉”だ」

帝太郎の背後に立った玉郎が、主人を気遣いながらそう告げる。

「この玉は……踏んだくらいで割れてしまうほど柔らかいものなの？」

再びうつむいてしまった帝太郎の口からそんな言葉が放たれる。

はつきりと態度に表さずとも、帝太郎が苦しんでいるのが手に取るように分かってしまう玉郎には、この台詞が含んだ重みが痛いほど伝わってくる。だから応えるまでに少し間が開いてしまった。

「……帝太郎、俺が今から話す内容はお前が正式にこの家を継いだ時に親父さんから聞かされることになると思うんだが」

どうして自分は帝太郎よりも玉封師を生業とするこの家について詳しく知っているのだろう。

玉封じの鬼になるべくして、眼前の祭壇に祭られている間に「教育」されてしまったらしい、膨大な知識。

こんな思いをする位ならそれら全てを今すぐにでも捨ててしまえたら……。何度もそんなことを思っては悩んだ。

しかし、得てしまった以上、知識なんてものはそう簡単に捨てられるものではないのだ。

ならば、帝太郎を護るために最大限活かそう。

いつの頃からか、玉郎はそう考えるようになっていた。

「俺もお前と巡り会うまではこの祭壇の上に安置されていた」

「玉郎も……？」

「ああ。……あのな、帝太郎。堂内に安置されてる玉全てが俺みたいに主人に仕える鬼を封じ込めてるわけじゃねえんだ。簡単に言っちゃえば玉封じの鬼として活動可能なものは祭壇上に祭られてる奴らだけだ」

「……あの九つ？」

「そう。床の上にある玉が封じてる奴は、実ントコまだ浄化されてねえ。言うなれば不安定な均衡の中で、抱えてる負の念を少しずつ玉が浄化してる真つ最中の鬼たちなんだ。だから少しの衝撃で簡単

に封印が解けちまう。鬼の念が全て玉に浄化されるとな、その証として玉ん中に文字が浮かぶ」

玉郎が言えるのはここまで。それ以上は帝太郎自身が考えることだ。そこまで一気に話し終えると、玉郎は黙って帝太郎を見つめた。「……一つだけ聞いてもいい？」

真っ直ぐに玉郎の瞳を見据えながら。

先刻まではこちらに顔を見せないようにうつむいていた帝太郎。

今、自分に向けられたその面には、さっきまでの弱気な迷いは感じられない。その表情に、玉郎は少しだけ心が軽くなった。

いつものようにニヤリと微笑ってうなづく玉郎に、帝太郎が言葉を続ける。

「玉に浮かぶ文字は……その鬼が抱いていた念の集大成？」

「ああ」

帝太郎は自分の主人なのだ。己の、弱いと思える一面を曝け出すことになっても構うまい。玉郎の玉に浮かんでいる和歌の歌意を判ずれば、自分が抱いていた念が誰かを恋い慕うものだったことは容易に推察出来る。

“かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは”

玉郎には故あって別れてしまった大切な女性むすめがいた。その人を恋い慕う気持ちがどこかで狂い、彼を鬼に変えてしまった。

狂おしいほどに誰かを想う心……。

その対象が恋人と妹、と違ってしまつてはいるけれど、玉郎の思ひも帝太郎のそれも、恐らくは大差ない。

だからこそ、二人の波長はぴつたりと合ったのだ。

「あんな、帝太郎」

「ん？」

「俺の和歌うたな、今は過去だけに向けられてるわけじゃねえんだ」
そこで帝太郎を抱き寄せる。

「俺の主人はお前だから、な？」

相当照れ臭いのだろう。耳まで真っ赤にしてそう告げると、玉郎は帝太郎を引き寄せる手に力を込める。

「……分かってる」

小さくそう呟くと、帝太郎はしばしの間、子供のように玉郎に身体を預けた――。

御^み霊^{たま}屋から出て家の玄関をくぐると同時に、味噌の香りに包まれる。

「兄さん、嫌いな物あったっけ？」

聞きたいことは山程あるうちに、あえてあちらでのことを尋ねない^{さたろう}佐太郎に、帝太郎は内心感謝する。

「ないよ」

犬のように鼻をひくつかせながら微笑む帝太郎に、玉郎がすかさず毒づく。

「嘘つけ！ お前、椎茸とピーマンは分からねえように細工しないと食わねえだろ」

「そうだったっけ？」

しれつと言つてのける帝太郎に、玉郎が力ない溜め息を落とす。その様を見て、佐太郎が吹き出した。

「大丈夫。メニューは味噌汁とアジの開きだから。あとサラダもあるけどピーマン入ってないし」

そこで思い出したように玉郎を見やる。

「玉封じ……じゃなくて……玉ちゃんさん？……も俺たちと同じもので平気？」

「た……玉ちゃんさん……？」

一瞬我が耳を疑ってしまった玉郎である。佐太郎が自分のことを気遣って鬼呼ばわりしないでくれたのは分かる。分かるのだが、そりやないだろう、と思ってしまう。しっかりしているように見えても、矢張り帝太郎と佐太郎は血を分けた兄弟だ。そう思うと、横で声を押し殺して笑っている帝太郎さえも何となく恨めしい。

「あのな、俺の名前、玉郎っつーんだけど」

軽く帝太郎を睨み付けながら告げる。

「いいじゃん。玉ちゃんさんでも、何か響きが新鮮で僕は好きだよ。」

帝太郎は明らかに調子に乗っている。堪え切れなくなったのか、大声で笑いながらそうまくし立てた。

「冗談じゃねえ！ 大体元はと言えばお前が……！」

お決まりの夫婦喧嘩の始まりだ。しかし、いつもなら止めてくれるはずの菜奈子が、ここにはいない。

「あ、あの」

この状況に不慣れな佐太郎では二人を軽くあしらって「はい、お終い」なんて芸当は到底出来るはずもなく――。

「またそうやって僕のせいにする！」

「お前のせいだろ！」

「違うつたら！ 玉ちゃんが佐太郎に自己紹介しなかったのが悪いんじゃない！」

「何を……？！」

歯止めのない口論はどんどんエスカレートするばかり。

「ちょ、ちよつと二人とも……あんまり騒いじゃ」

今にも取っ組み合いになりそうな彼らの様子に、奥の間を気にしながら佐太郎が止めに入ろうとした、丁度その時――。

「何事だ？」

障子の向こうから静かではあるが、厳格で抗い難い声が響いた。

途端、室内はひやりとした冷気に包まれる。

「と……父さん」

この家に帰って来る以上、父と会うことは覚悟していたはずなのだが、こう唐突に出てこられては心の準備が出来ていない。

二人の喧嘩は一瞬にしてピリオドを打たれてしまった。

それと引き換えに、今度は部屋全体がぴんと張り詰めた空気に満たされてしまう。

「まあ、帝太郎……！」

だが、この場をもろともせずのんびりとした声を発した者が一人。言わずと知れた、瑠璃である。

いつもの小紋ではなく、付下げ姿なところを見ると、つい今しがた外出から戻ったばかりなのだろう。

「母さん……」

眼前の母は、今でも変わらず美しかった。

少し痩せたようにも思えるのだが、彼女の歳を思えばそれも致し方あるまい。

瑠璃の声に少しだけ緊張の糸が緩んだのか、帝太郎はにっこり微笑むと

「ご無沙汰しています」

そう告げた。

「本当に。でも元気そうで母さん安心したわ。さ、こんなところで立ち話もなんだし、あつちでご飯にしましょう？——ね？」

最後の「ね？」は斜め後ろに立つ隆親たかちかに向けられたもの。厳然な父も彼女にだけは弱いのか、黙ってうなずくと向きを変えて障子の向こうに引込む。

「さ、後は私がやるからみんなはあつちへ」

隆親の後ろ姿を見遣りながら瑠璃が三人を土間から急き立てる。促されるままに障子をくぐると、隆親は掘りごたつのある居間の、更に奥に当たる客間に座して待っていた。

床の間を背に、上座へ腰を下ろした隆親の前には、八尺四方の黒檀を材とした黒光りする座卓が重々しく置かれている。

佐太郎が「兄さんはそこへ」と小声で指し示した位置が、隆親の真正面に当たるところだったから、帝太郎は一瞬躊躇ためらった。しかし、玉郎がそそくさとその近くに座ってしまい、洪々従う羽目になる。

（玉ちゃん、何でそこに座ったりしたの？）

自分の斜め後ろに黙然として座す玉郎に、小声で問い掛ける。

（位置的にここが一番“奴”と離れてる）

応じる玉郎の視線は、隆親の胸元にある巾着に注がれていた。

あの玉の鬼と仲悪いの？ そう尋ねようとした丁度その時、盆に料理を載せた瑠璃がやって来た。

「あら、鬼さん。帝太郎の後ろなんかに座っていたんじゃ、ご飯食べ難いでしょう？ こっちへいらっしゃいな」

ふうわり微笑んでそう告げる。

どうやら瑠璃の笑顔には誰も勝てないらしい。

一瞬眉根を寄せて彼女のほうを見遣った玉郎であったが、茫洋とした笑みを返され、彼女の言に従ってしまう。

玉郎が座つたのは佐太郎の右横。帝太郎から見ると座卓の角を挟んで斜め左隣になる。それを見届けてから、瑠璃が佐太郎の正面に座す。

しばらくの間は誰も口を開かず、黙々と食べ続けた。

「帝太郎」

最初に沈黙を破つたのは隆親だ。

「お前はいつもそんな風に鬼を外に出しておるのか？」

それは、先刻佐太郎が告げたものと同じ。しかし、重みは全然違っていた。

「はい」

当然、帝太郎の答え方もさつきとは違う。

「玉封じの鬼は玉封師にとっては僧侶が使う念珠のようなものだ。わしは以前、お前にそう告げなんだか？」

「仰いました」

「ではもう一度問う。何故、お前の鬼は四六時中玉の外に出ている？」

そこでチラリと玉郎を見遣る隆親。その視線を受けても玉郎は何も言わなかった。

「父さん、玉郎は僕にとって貴方が仰る様な道具ではありません。僕も以前そう申し上げたはずですよ」

凜とした声音で言い返す帝太郎。その彼が、いつもよりも頼もし

く見えてしまうのは言うまでもあるまい。

「まあ、それも良からう。だが覚えておけ。目先の情は命取りになり兼ねんと言ふことを」

会話はそこでふつつりと途絶えた。

それから又、死んだように静かな食事が続けられた。まるで帝太郎に隆親の言葉を吟味する時間を与えるかの様に――。

重苦しい雰囲気、昼食が終わると、帝太郎はそそくさと客間を後にした。

瑠璃がそれを止めようと腰を上げかけたのだが、隆親の視線によって制される。

瑠璃でさえそんな具合だったのだ。無論、息子である佐太郎に何とか出来るはずもなく。

無言で立ち去る帝太郎の後を、玉郎が慌てて追い掛ける。

客間を出た帝太郎が向かったのは、家の裏手にある山だった。そこは昔、帝太郎が彩音とともに色んなことをして遊んだ場所。

「なあ、帝太郎」

「ん？」

「俺、思っただけだな、親父さんの言ってることも一理あると思うぜ？」

「分かってる」

木々に阻まれ虫食いのように見える空を見上げながら――。自嘲気味に歪められた帝太郎の口許が、玉郎には何だか寂しげに見えた。「でもね、僕は玉ちゃんのことを単なる道具だなんて思いたくないんだ……」

告げられた言葉がとても嬉しい。

さつき隆親に向かって帝太郎がそう言ってくれた時も、玉郎は飛び上がるほど感激したのだ。でも、玉郎にとっては好ましいこの考えも、玉封師たる帝太郎にとっては邪魔な感情だというのもまた事実。

帝太郎がこの先玉封師としてやっていくつもりならば、その優しさは仇になってしまふ時が来るかも知れないから。

隆親は息子にそれを伝えたかったのではあるまいか。

「あんな、帝太郎。お前が俺のことをそんな風に思ってくれるって

えのは本当に有難い。だがな、これだけは覚えとけ。託児所の子供たちや、その他お前が大切だと思う人たちを守りたいと思うんなら……俺のことは深く考えるべきじゃねえ。俺は玉封師に仕える鬼だ。何だかんだ言ったって生きてる人間と同等の存在にやあなれねえんだからな」

「玉郎……？」

吐き捨てるように告げたセリフに、帝太郎がきよとした面持ちをする。

「俺が今言ったこと、忘れんなよ！？」

帝太郎の顔をまともに見ることが出来なくなつて、そそくさと向きを変えると、今来た道を戻って行く玉郎。

「そんなこと出来るわけないよ。玉ちゃんだって僕にとっては大事な友達なのに……」

だから玉郎には聞こえなかったのだ。

帝太郎がぼつん……と呟いたその一言が――。

「兄さん、本当にもう、帰っちゃうの？　一晩ぐらい泊まつて行けばいいのに……」

山から下りて来ると、山道の入り口に佐太郎が立っていた。傍らには瑠璃の姿もある。

二人の姿を見付けると、帝太郎は「これからすぐ帰ろうと思うんだ」と告げた。これ以上ここに留まつてしまつたら、玉郎がいなくなつてしまいそうな気がしたからだ。

（この家には柵しがらみが多すぎる）

それは、『玉封師と玉封じの鬼』という名の柵――。

考えないようにしていても、こここの空気がいやでもそれを想起させる。かく言う帝太郎自身でさえも、霊屋に入った折には普段は表に出さないようにしていた、妹に対する後ろめたさのようなものを感ぜさせられてしまったのだ。

「そうよ、帝太郎。そんなに急ぐことはないんじゃない？　母さん

ね、貴方にお父さんともう少しお話してみて欲しいの。今のままの状態で二人が別れてしまうのって何だか寂しいんですもの」

瑠璃は隆親のことも帝太郎のことも愛している。だからこそ、余計に自分たちに仲良くなってもらいたいのだ。

「ごめん、母さん……」

母の気持ちは分かっているけど、今の帝太郎には玉郎も瑠璃と同じくらい大切な存在なのだ。

さっき山中で告げられた言葉が、妙に心に引っ掛かっている帝太郎にとって、今一番気に掛けなければならないのは玉郎のこと。

「父さんとはいつかちゃんと話をするから」

それは必要なことだと自分自身理解している。ただ、今はまだ踏み切れないだけ。

沈痛な面持ちをして佇む瑠璃の手をそっと握ると、帝太郎は父に挨拶するために家の玄関をくぐった。

「父さん」

父は、さっきと変わらぬ姿勢で客間に座していた。

帝太郎の呼び掛けに心持ち顔を上げると

「帰るのか？」

まるで予期していたかのようにそう問い掛ける。

「はい」

何故かいつでも隆親は、帝太郎がしようとしていることを前もって知っている。十八の歳に家を出る、と切り出した時だってそうだった。

「帝太郎。いつだったか佐太郎がこう言ったことがあったよ。お前の鬼はわしのものよりも人間味がある、とね」

「佐太郎が……？」

「ああ」

そういえば、御霊屋みたまやの鍵を借りようと実家に電話した際、煮え切らない佐太郎を玉郎が一喝したことがあった。それ以前に二人が交

わるようなことはなかったはずだから、佐太郎がそんなことを言ったのだとすれば、多分あの電話がきっかけだろう。

「……お前、わしの鬼を見たことはあったか？」

「いいえ」

どうして父は自分にこんな話をするのだろうか？　一瞬そんな思いが頭の中をよぎる。

「これがわしの鬼だ……」

隆親の言葉と同時に目の前を一陣の風が吹き抜ける。その風圧に思わず目をつぶった、ほんの一刹那。

目を開けると、隆親の横に男が一人立っていた。

その瞳は閉じられ、口は堅く閉ざされている。玉より外界に呼び出されたというのに、何も感じていないかのような、そんな雰囲気。彼は昔、闇喰らいと呼ばれていた」

「闇喰らい？」

「そうだ。世の中に存在する負の気を喰らい、秩序を保とうとする一族。それが闇喰らいだ。帝太郎、彼らがその身に取り入れた負の気は一体どうなると思う？」

隆親が話す間も、鬼はただ黙ってそこに佇んでいる。

自分のことを語られているのに、全く関心がないようなその雰囲気。いや、そもそも帝太郎たちの会話自体、耳に入っていないのかも知れない。

閉ざされているのはその双眸だけではないようだ。

話を聞きながらふと鬼に視線を向けて、帝太郎は何故だかとても切なくなった。

「……分かりません……」

搾り出すようにそう告げると、父は淡々と言葉を続ける。

「体の中に蓄積するんだ。そうしてやがては術者自身がそれに耐え切れなくなり、鬼と化して暴走を始める。——帝太郎。彼はな、和^か真^{ずま}はわしの親友だった……」

告げられた言葉に、一瞬我が耳を疑う。

「わしはこの手で親友を封じたのだ」

そこまで言うと、隆親は一旦口をつぐんだ。そうして噛み締めるように再び言葉を紡ぎ始める。

「和真が闇喰らいとしての能力を発揮していた時には人々は媚びへつらってそれを利用した。しかし……彼が異形と化した途端、『消せ』と騒いだのだ。……人の心とは移ろいやすいものだ。そうは思わんか？」

隆親にとって、親友を封じたその仕事こそが、実は玉封師の長としての初仕事だったことを帝太郎は知らない。

今から三十三年前――。

その頃はここ――鹿路ろくろの集落――も、玉封師を生業とする二条院家と、それをサポートする闇喰らいの一族――八重垣家やえがき――とが共存していて、世帯数も両家を合わせて五十を優に越えるそれなりの規模の村だった。

八重垣家は沢山の垣根が連なるという名が表す通り、二条院家を中心として放射線状に居を構え、その領域内へ邪気が侵入するのを防ぐ一族。

正確には彼らは邪気を跳ね返すのではなく、その身のうちに取り込んでしまったため、多くの者が短命なことが特徴である。この能力は二条院家のそれと違い、修行して高めたりするものではない。濃い、薄い之差はあれど血の中に自然に引き継がれ、本人の意思とは関係なく、それを発揮してしまう。

そんな八重垣の者にとって、その能力が抜きん出ていることが良くないのは言わずとも分かるう。

隆親の親友であった和真は、そんな一族の中にあって他者の数倍の力で闇の気を吸い取ってしまう青年だった。

常に闇の世界と対峙しなければならぬが故にその様なものから怨みをかってしまう二条院家と、願わずとも負の気をその身に取り込んでしまう八重垣家。

末期の時、体内に取り込んだ闇に吞まれて鬼と化す者の多い八重垣の人間にとつて、異形の者たちを滅することなく封じて浄化する玉封師一族の傍にいることは有益だと考えられていた。

その日、隆親は御霊屋みたまやの入り口前で長いこと逡巡していた。

当主であつた父が心臓発作で突如他界したのは、庭の桜が満開を過ぎ一斉にはらはらとその花びらを落とし始めたころだつた。

気が付けば、桜が全て散り終えるまでには慌しく跡目を継がされていた隆親である。明日には親友の義理の妹と祝言を挙げることも決まっている。当然、こんなところでのんびりしている暇などない。しかし彼には今までの当主にはない、ひとつの問題があつたから――。

二条院家の人間は普通、玉封師として一人前に仕事がこなせるようになる、御霊屋内の祭壇から自分に合う封じの鬼を見つけ出すことになっている。

隆親が玉封師として人の手を取ることなく仕事が終えられるようになったのは六年前、彼が十八のころだ。だから順当にいけばその首に封じの鬼を込めた玉をぶら下げていて然るべきなのだが、隆親は今日に至るまで波長の合う鬼を見出すことが出来ずにいた。

否――。真実を言えば、他の者たちのように適当なところで妥協して、そこそこに合う鬼と折り合いを付けられなかっただけ。

そんな隆親といつもつるんでいたのが八重垣家内でも群を抜いて闇の吸収能力が高い和真である。その能力が優れているということ、は、それだけ狂気へのカウントダウンが早いということ。しかしそんなことを感じさせないざくばらんな性格の和真が、鬼を持つことなく片意地張って過ごしてきた隆親には自然体で付き合える数少ない存在だつた。

しかし――。

明日には妻を娶めとることになっている。そうなれば独りでわがまを貫ける状況ではなくなるはずだ。自分の身勝手に、伴侶となる女

性にも迷惑をかけてしまいかも知れないのだ。それだけは何としても避けたかった。

そんな思いから、適当な鬼と折り合いを付けようと決心し、ここへ来た。しかし、迷いが残って御霊屋に入らず、躊躇していたところを和真に見咎められてしまった。

「他人に理解してもらえねえことをうじうじ考えたってしゃあねえだろ？ 自分の信念貫いて生きるって決めたんならその状況に誇りを持って生きろや。それが出来ねえんなら最初から抵抗なんてすんな」

そんな自分を見かねての、和真のセリフである。

その背後に血の繋がらない妹を従えて凜と放たれた親友の声音に、思わず息を呑む。

「こいつのためだつてんなら尚更やめとけ。んなことされたって嬉しかねえよ。——な？」

和真にそう聞かれ、瑠璃がこくん……とうなずく。

彼女のことは小さいころから知っている。

先代が仕事で被いをした折に鬼女が連れていた赤ん坊。それが瑠璃だった。

御霊屋のどこかには、その鬼女を封じた玉もあるはずだ。

鬼女を封じた後、手を尽くして探したにも関わらず、身寄りを見つけることが出来なかった彼女を、父はどういうわけか、八重垣家——それも和真の家——に託した。

それは自分たちが6歳のころの話だ。

預けられた赤ん坊のことが気になって、それまでは面識のなかった和真のもとをよく訪れるようになった。

正直隆親の中で、和真の第一印象は暗い奴で……。だから余計そんなところへ預けられてしまった赤ん坊が心配で仕方なかったのだ。ある日突然降って沸いたように出来た妹を、戸惑いながらも世話していた和真。そんな眼前の親友が、瑠璃を通して徐々に笑顔を見せるようになっていったのを、隆親は覚えている。

それは自分にしても同じで……。いつも二人の後ろを付いて歩いては、男の子顔負けのじゃじゃ馬振りを披露してくれた瑠璃。そんな彼女を見ていると、嫌なことや悲しいことを全て忘れられる気がした。心底愛しいと思った。

その、妹のような存在であつたはずの瑠璃が、十六を超えた辺りから、時折こんな風に女らしい表情をするようになった。

それに隆親が気付いてから何となく関係がぎこちなくなつてしまつた二人。ざわつく心を和真に目ざとく察知され「それは恋心つっ―んだよ」と諭されたつけ。あれはいつのことだつただろう。

兄の影に隠れるようにしてこちらを見つめる瑠璃を見て、ふとそんなことを思う。

一瞬過去に引きずられかけた自分を誤魔化すように荒々しく和真を押しつけて御霊屋に入ろうとした隆親であつたが、瑠璃の、「待つて」という言葉で完全に動けなくなつてしまつた。

「たつ君が自分のしたいと思うこと、私のせいで曲げなきゃいけないんなら、貴方とは一緒になれないよ……」

線は細いくせに、こういう頑固なところは子供のころからちつとも変わらない。

和真の影からではなく、一步前へ踏み出して自分を見つめる瑠璃に、思わず苦笑がこぼれる。その大きな黒い瞳を見ていると、迷いとかそういうものが全て浄化されてしまいそうな……そんな力のあつる視線だつた。

そついえば瑠璃といつと、いつも前向きになれたつけ。

封じの鬼なんていなくなつて自分が強くさえあれば、玉封師としては何の問題もないではないか。長い人生だ。いつかきつと自分に相応しい鬼が現れる。それまで待つたからといって何の問題があるう？ それで何か言う奴がいたら、「それがどうした？」と胸を張つて言い返してやろう。自分が瑠璃を全力で守つてやればいいだけの話じゃないか。

彼女の目を見ていたら、いつの間にかそんな風に思えるようにな

っていた。

結局その日、隆親は御霊屋に入ることなくそこを後にした――。

「俺がもしも狂っちゃったら……その時はお前の手で終わらせてくれ」

隆親二十四の夏――。

瑠璃と隆親が結婚して、四ヶ月ばかり過ぎたころ。

縁側に腰掛けて、二人して井戸から引き上げたばかりのスイカにかぶりついていた時、和真がふと真顔になってそう言った。

「瞬間何のことを言っているのか理解出来なかった隆親に、ニヤリと笑って「頼んだぞ」と告げた親友の声が、数十年経った今でも時折蘇る。」

その時は「そうなたら一生封じの鬼としてこき使ってやるよ」などと軽口を叩いた隆親だったが、その日がそれから遠からずして訪れてしまうなんて、思いもしなかった。

明るく気さくな性格だった和真が、締め切った薄暗い部屋から出て来なくなり、時折奇声を発するようになったのは、その年の暮れのことだった。

それは日を追う毎に顕著になり、また状態もどんどん悪くなっていく。

そうになると、周囲から和真はもう駄目だと囁き合う声が聞かれるようになり――。

せめて友であるお前の手で終わらせてやれ。

そう詰め寄られたのは、丁度今時分の季節――二月の初旬頃――だったと記憶している。

皆からそう提案された時、隆親は身を引き裂かれるような思いがしたのだ。

断れば、ならば別の者に頼むまでだと吐き捨てられた。

玉封師は鬼を消すことを生業としているわけではない。

鬼を消すというのは、その存在自体を無に帰す^きということ。

それは、彼らの想いを聞き届け、全てを包み込んで害のない存在へと変えていく、玉封師とは性質を異^{こと}にしている。

玉封師は封じの玉を使って怨嗟に捕らわれた鬼を縛し、時間をかけてその業^{ごう}を玉に吸収させる。封じた鬼が再び穏やかな存在へと転じることが出来るように――。

そういう術者なのだ。

その自分が手を下せば和真を消滅させるのだけは回避出来る。

当時の隆親は、玉を持たないまま長になったことで生じた一族との軋轢で苦しんでいる時期でもあった。

一族の間では長になってもなお、我を張り続ける隆親を何とかしてねじ伏せてやろうという風潮が強かったし、当然若き長をそのかしたであろう和真や瑠璃に対する風当たりもきつかった。

悩んだ末、「消滅させるわけではないから」と自分に言い聞かせるかたちでその依頼を請けたのだ。

「本来ならば封じてすぐの鬼を玉封じの鬼として使役することは不可能だ。しかし、あの時のわしは……理由はどうあれ親友を玉の中に閉じ込めてしまった自分が許せなかったのだよ」

その自責の念から逃れたくて、隆親は封じてすぐの和真を外界に解き放ってしまったのだ。

自分は自由になった親友に、「助けられなくてすまなかった」と謝りたかったのだろうか。

今となつてはその時の自分が、何を考えていたのかはつきりと思ひ出せない。

ただ、和真を解放すると言うことは、隆親自身を罪の意識から逃れさせることでもあったから、その罪を償うために自分の血が必要だというのなら、それでも構わないと思ったことだけは確かだ。

しかし、眼前の鬼は怒り狂って隆親を襲うことをしなかった。それどころか五感の全てを心の中に封じて、ただそこに在った。

封じの玉が、怨恨の情を少しも吸収していない状態で、外界に投

じられることは和真にとってこの上なく辛いことだったのだろう。

和真抹殺の話が隆親の許に持ち込まれた段階では、和真は完全には狂っていなかった。

そんな状態の中で、かつては仲間であった者たちの口から「用済み」だの「終わらせてやれ」だの言い交わされるのを耳にして、果たして彼は平気でいられただろうか？

もしかするとそのことが彼を更なる狂気へと追いやっていたのではないだろうか。

生成りの鬼へと転じてすぐ、和真が真つ先に同族である八重垣の一族を手にかけたのも、もしかするとそのためだったのかも知れない。

それとも闇の気に吞まれ、我を失って殺戮を繰り返してしまう者が現れるのを、自分で最後にしたいという思いが絡んだ故だろうか？
いずれにせよ、八重垣の血を引く者をことごとく皆殺しにし、その両手を朱に染めて、立ち尽くす和真は、確かにその双眸から涙を流していた。

少なくともその時の和真は、隆親の知る和真だったから。

だからこそ、長としても術者としてもまだまだ未熟だった自分にも封じることが出来たのだ。

「わしは和真にすまないことをしたと思っている。だがな、起こってしまったことは取り消せんのだ。和真にとって辛いと分かっている、わしはこやつを呼び出さねばならん。いつそ、封じを解いたあの日に狂ってくれていたら……。不謹慎かも知れんが、正直そんな風に思うよ……」

封じの玉から解き放たれた時、自分を喰らって逃げてくれていたならば――。

こんな苦しい思いをさせられるぐらいならと、鬼と化して暴走してくれていたならば――。

そのほうが、和真にとってはよっぽど幸せだったかも知れないの

に――。

“世の中の人の心は花ぞめのうつろいやすき色にぞありける”

“世の人々の心は色が変色し易いと言われている花染めの衣のようであることよ”

和真を封じた玉に、最近になって浮かんできた言葉を見ると、その思いは一層募る。

玉を破壊することなく封じ込めた鬼を解き放つには、通常そこに浮かんできた文言を理解し、それを声に発して読み上げることが必要とされる。

現に、玉郎と帝太郎の場合はそうだった。

しかし、鬼を封じた本人であれば、その手順を踏まずに封印を解くことが出来る。

和真を封じたのが隆親であった以上、封じの玉に文字が浮かんでいるかいないかは、彼の封印を解くか否かの問題にはならなかった。もちろん、念を棄て切れていない鬼を外界に出すことにはそれ相応のリスクを伴う。

普通ならば間違いなく、開放されたと同時に鬼はその牙を剥くからだ。

この意味において言えば、やはり隆親のやったことは自殺行為以外の何ものでもない。

だが、今こうして和真の玉に浮かんできた歌を見ると、彼が自分を裏切った者たちを恨んでやりたいという気持ちと、信じたいという気持ちの狭間で葛藤していたことが分かる。

だからこそ、彼は玉から解放された時、再び鬼として狂えなかったのだ。

狂ってしまったえば、また誰かを傷付けてしまうから。

しかし、尋常な精神のまま誰かと対峙することは、疲弊しきつた

和真には出来なかった。その結果が、総てを閉ざして外界からの刺激を断ち切る、と言う行為となって現れたのであろう。

「父さん……」

淡々と言葉を紡ぐ父に、帝太郎が思わず声を掛ける。

「いいか、帝太郎。一時の情に流されるな。誤った思い込みは、皆を確実に不幸にする」

そこまで言つて、ふと帝太郎を見つめると、隆親は父親の温かみを含んだ声音で

「一段落したらあの鬼と一緒に顔を見せなさい。返さねばならないものもあるだろうから」

まるで独り言のようにそう告げてそれっきり口を閉ざしてしまつた。

そんな隆親に、帝太郎も無言でうなづく。

父は自分が御霊屋に入つたことを知っていて、あえて何も聞かずにいてくれる。今はその好意に甘えさせてもらおう。

父の視線を背中に感じながら、帝太郎は静かに部屋を後にした。

家から出ると、玄關脇で玉郎が待っていた。

「……俺は親父さんが従えている鬼が嫌いなわけじゃねえんだ。ただ……奴を見てると何だかすげえ苦しくなっちまう……」

だから無意識に和真のことを避けてしまふのだと弁解する。自分の顔を見るなり小声でそう告げた玉郎に、黙つてうなづく帝太郎。

人が人ならざるものになるということは、相当に辛い「何か」が関与してくるのだろう。

過去にそういう思いがあつたと言う事実だけで、和真と玉郎は十分過ぎるほど共通しているのだ。

だからその念に囚われて苦しむ和真を見るのが、玉郎にとって耐え難いことだと言うのは、帝太郎にも理解出来た。

それらを乗り越えて、目の前の鬼が笑ったり怒ったり悲しんだりしてくれる様を見られるだけでも自分は幸せなんだな……と、そう

気付けた。それだけでもここへ来た甲斐があつた気がする。

「さあ、帰ろう？ 玉ちゃん」

言つて、玉郎に破顔一笑してみせたところで、丁度玄関先に佐太郎が回してくれた車がやつて来る。

玉郎を急かしてそそくさとそれに乗り込むと、

「それじゃあ、また……」

車に近付いて来た母にそう告げる。

そんな帝太郎に、瑠璃はただ、うなずきながら無言で微笑む。

また……。

帝太郎が家を出てもう何年にもなるが、彼が次の訪問をにおわせる別れ言葉を告げたのは、今回が初めてだったことに、瑠璃は気付いていた――。

生家を出たのは午後二時過ぎだったから、四時過ぎにはアパートに帰り着いていた。

二月の初旬だ。

人気のなかった家が冷え切った様は用意に想像できるだろう。

「玉郎……」

見慣れた六畳一間に足を踏み入れると、帝太郎はいそいそとこたつにもぐり込みながら玉の中の玉郎に呼びかける。

JRの最寄りの駅から帝太郎宅までは車でも三十分近くかかってしまう。

ペーパードライバーで通している帝太郎がマイカーなんて持っているはずもないので、当然駅からはバスを利用することとなった。

バスは言うまでもなく公共の交通機関だ。玉郎は経費削減のために電車に引き続き玉の中の住人と化した。

帝太郎が彼のことを「玉郎」と呼ぶのは、大抵の場合が玉封師としての仕事絡みであることが多い。

「何だ？」

玉郎のほうもそれを心得ているので、玉の中から出ると妙にしかつめらしい顔をして帝太郎の真正面に座した。

「ほら、これ……」

そう言つて帝太郎が差し出したのは、御霊屋みたまやから失敬してきた封じの玉である。但し、その玉は真つ二つに割れている。

「ん……？」

差し出された玉を受け取ると、玉郎はそれをまじまじと見つめた。「二つをくつつけて光に透かしてみて」

部屋の西側に面した窓から、薄紅うすくれなひに染まる夕日がぼんやりと差し込んでいる。それを指差して帝太郎が言う。

“遊び せん や 生れけむ^{うま}

戯れせ^{たはぶ} と 生れけん^{むま}

遊ぶ 供の声 ば

我 身さへ ゆるがるれ”

真つ二つに分かれてしまっている玉を一つに結合させると、どす黒さが薄れる。透明感を取り戻したそれを光にかざすと、今までは見えなかった文字が浮かんでくるのだ。

「バスの中で気付いたんだ」

「ふん。やっぱり祭壇に祭ってあつたつてえのも、まんざら無駄なことじゃなかったってわけだな」

ニヤリと微笑^{わら}って玉郎が言う。

「どういうこと？」

「こいつ、九つの玉に囲まれて安置されてただろ？ あれは一応考えあつてのことだったってわけさ」

「周りの玉が、この玉に封じられていた鬼の念を引き出したってこと？」

「ご名答」

ぼやぼやしていても一応は玉封師。こういうことにかけて、帝太郎は飲み込みが早い。十八で家を出、玉封師としての教育を中途半端にしか受けていないとは思えない勘の良さだ。

だからこそ玉郎は帝太郎を信頼出来る。自分が持っている、玉封師に必要な知識を少しだけ与えてやれば、彼はそれを理解してくれるから。これも並外れた才能の成せる技だろう。

「所々読めなくなってるけど、これ、何のものだ分かる？」

玉自体が割れてしまっているために、本来文字があるべき箇所にヒビが入ってしまったっている。そのせいで、何文字か欠字になっているのだ。

玉郎の出現で、『古今和歌集』だけは一応にマスターした帝太郎であつたが、他のものに関しては全くお手上げ。

申し訳なさそうに玉郎のほうを見遣る。

「勉強不足だぜ、帝太郎。これはな、『りょうじんひしょう梁塵秘抄』ってのに出てくる歌だ。“遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん 遊ぶ子供の声聞けば 我が身さへこそゆるがるれ” ってな。結構有名だぜ？」

「そうなの？」

「……多分……」

一般的に知名度があるかどうかは別として、その筋では割とポピュラーな歌である。その歌詞の通り「遊びをせんとや生れけむ」と称され親しまれているものだ。

「じゃあ、歌意なんかも分かる？」

一頼るのも十頼るのも「頼る」と言う行為において言えば一緒。そう考えて開き直った帝太郎は、にっこり笑って問い掛けた。

玉郎のほうも帝太郎の性格は熟知している。はあっと一つ溜め息をつくと、諦めたように話し始めた。

「掻い摘んで言うとな、遊び興ずるためにこの世に生まれてきたんだろうか？ 無心に遊んでいる子供の声を聞くと、自分の体まで自然に動き出してくるようだ、みたいな意味だよ。分かったか？」
「……うん。……何となく」

歌意は分かった。

でも、思考回路が「この言葉が一体どのような意味を持って玉に浮かんできたのか」というところに至ると、頭の中をクエスチョンマークが飛び交ってしまふ。

「裏意味でもあるのかなあ……」

玉郎の手中の玉を見詰めながら呟く。

「ちよつと貸して」

こたつ越しに手を伸ばすと、帝太郎は玉郎から玉を受け取った。何度 矯ためつ 眇すがめつして見たところで状況は変わらない。

「はあ。駄目だあゝ！」

半ば諦めモードの帝太郎である。

玉をこたつの上に置くと、ごろんと横になった。それから思い出したように一言。

「お腹空いた……」

どうやらこれ以上考えることは、今の帝太郎には無理のようだ。そう判断した玉郎は、そそくさと台所へ向かった。

相沢圭吾が再び『つくしんぼクラブ』を訪れたのは、月曜日の昼過ぎのことだった。

美紀は隣のプレイルームで玉郎たちと遊んでいる。

「節分の時の残りで恐縮なんですけど……」

いつかみたいに、圭吾を奥の一室に通すと、帝太郎は湯気のくゆる日本茶とカラフルな豆菓子を勧めた。後者は豆まきの日に、オーソドックスな煎り大豆だけでは寂しいという発想から帝太郎が買ってきたものだ。

中でも帝太郎のお気に入りは、煎り大豆を抹茶の砂糖でコーティングした、するが茶豆。当然、無意識のうちにそれをよって食べていたらしく、菓子鉢の中には緑の粒が少なめだ。それを気にしてのセリフに、果たして圭吾が気付いたかどうか。

昼の休憩時間を利用しての来訪らしく、そわそわと時計を気にしている。

当然、出されたお茶にも——ましてや豆菓子になんて——目を向ける余裕はないようだ。

唐突に用件を切り出した圭吾に、頭の切り替わっていない帝太郎は一瞬きよんとする。

「やはり駄目ですよね……」

それで圭吾は縮こまってしまったのだ。

「あ、いえ、駄目とかってわけじゃあ……」

心底落ち込んだ面持ちで自分を見つめてくる圭吾に、帝太郎が慌てて首を横に振る。

「じゃあ、お受け頂けるんですね!？」

それとこれとは話が別である。言葉の綾とは厄介なものだ。思わず口走ってしまった自分の言葉に首を絞められるとは。

あまりにもにこやかにそう問い掛けてくる圭吾に、帝太郎は今更

「でも」という言葉を継げなくなる。

「明日から一週間、美紀のことをお願いします！　こんなこと、本来ならば親類縁者に頼むべきだと言うことは重々承知しております。でも……生憎近隣にそういう伝手^{つて}がないものですから……」

申し訳なさそうに頭を下げる圭吾。

彼の頼み事とは、彼が出張に出ている間、娘の美紀を一週間昼夜を問わずに預かってくれというものであった。

いくら託児所だとはいえ、ここ『つくしんぼクラブ』は、二十四時間体制で子供を預かっているわけではない。

圭吾の申し出は、いわば規定外の依頼なのだ。

故に彼と対峙する帝太郎も、いつものように「じゃあ」なんて軽く安請合い出来ないでいた。

所在無げにテーブルの上を見つめてから、思い立ったようにするが茶豆を一粒手に取る帝太郎。

根拠はないけれど、甘い味を取り入れたら心の整理が出来るような気がして――。

「いいじゃねえか、帝太郎。一週間ぐらい」

しいん……と静まり返った室内に、突如玉郎の声が響く。

父親が来ているのに蚊帳^{かや}の外にされていた美紀が、我慢し切れなくなつて玉郎に二人の探りをねだつたのだ。

「玉ちゃん……」

ノックなしに扉を開け、突如顔を覗かせた玉郎の、予想外な言葉に帝太郎が思わず手にした豆を取り落とす。

それを拾つて身体を起こした帝太郎に歩み寄ると、声を潜めて玉郎が囁く。

（だつて考えてもみるよ。今、この近所じゃ得体の知れねえモンがうろついてる可能性があるんだろ？　俺としちゃあ、ここら辺に住んでる子供ら全員みーんなひつくるめて囲いてえぐれえだ）

（でも……）

（それにな、飯にも美紀ちゃんは数少ないその鬼の目撃者なんだぜ

？ 偶然出会ったってんなら構わねえけど必然的なもんだっただろうするよ？)

その言葉にしばし考え込む帝太郎。

確かに玉郎の言うことは一理ある。

二十年以上何の気配も見せなかった鬼が急に姿を現したというのも気になるし、その鬼がどうして美紀に姿を見せたのかも引つかかる。

玉郎の言うように何か特別な意味があるのかも知れない。

玉に浮かんできた文字から推察してみても、その鬼が子供に何らかの執着を持っている、ということだけは分かるのだ。だとしたらその鬼の姿を目撃し、かつ、鬼が求めているであろう「子供」という条件を満たしている美紀を傍に置くことは悪いことではないように思われた。

(でも、それじゃあ……)

まるで美紀を囷おとこにしているみたいで嫌なのだ。それが、帝太郎に今一步を踏み出させないでいる理由。

そんな彼の心を読んでか、玉郎が続ける。

(帝太郎、これはあくまでも美紀ちゃんの保護が第一目的だ。もしあの子が危ない目に遭いそうだったら俺たちが全力で護る。そのためにも絶対一緒にいるべきなんだ。それになあ、あんなチビを一人で一週間も留守番させることを思やあ預かってるほうが良いに決まってるんだろ?)

すぐるような眼差しで帝太郎を見つめている圭吾には、二人の声は聞こえていない。しかし、眼前の長髪長身男が、自分の頼みをバツクアップしてくれているらしいことは雰囲気です悟ったようだ。

「お願いします！」

玉郎の言葉に尚も悩んでいるらしい帝太郎の姿にじりじりして、ついには勢いよく頭を下げたのだから。

二人に頼まれてしまったのは、さしもの帝太郎も分ぶが悪い。

大きく一つ深呼吸をすると、

「分かりました」

半ば諦めたようにそう告げた。

さて、話によれば圭吾の出張は木曜日からといつことである。

「美紀ちゃん、一週間ほど所長のお宅でお手伝いさんするんですってね？」

冗談交じりにそう告げたのは菜奈子だ。

まだ七時半過ぎ、と子供たちが集まってくる時間には早いので、例によって時折雑談を交えながら、託児所内を清掃している。

今日は水曜日だ。

美紀の父親の出張は明日からなのだが、夜も明けやらぬ暗いうちから出掛けるため、実質美紀は今晚から帝太郎宅に預けられることになっている。

しかし、何と言っても預かる相手があの美紀だ。

お父さんがいない間、心配だから先生の家にいようね、なんて言ったって突っ撥ねるのは分かりきっていた。だからこそ、大人たちのほうでそれなりに口裏を合わせたのだ。

「でも所長の家だったら美紀ちゃんが『お手伝いさん』でも全然問題ないかも知れませんか？」

菜奈子は明らかに楽しんでいる。

「だって玉郎さんが居なかったら所長、一日だって生きていられそうにないんですもの」

そのセリフにはたきを掛けていた手をしばし休めると、玉郎がニヤリと笑って帝太郎を見遣る。

「俺の存在価値の高さが伺えるな」

確かにその通り。

家事全般を玉郎に任せっきりの帝太郎は、事実なので一瞬反論に窮する。

「玉ちゃんがなくなっちゃって菜奈ちゃんに来てもらうからいいよーだ！」

悔し紛れにそう吐き捨てたら、いつもはあっけらかんとしている

菜奈子がにわかに赤面してしまつて驚く。

(……お前、それ、菜奈ちゃんに嫁に来てくれって意味か?)

ぼそりと耳打ちされた玉郎の言葉に、帝太郎も顔から火が出そうになる。

そんなつもりはなかつた……と否定するのも彼女に対して失礼だし、その通りです……と肯定してしまうのも何だかくすぐつたい。

実際菜奈子が台所に立つ姿を想像するとそれはそれで素敵な気もする。……というより彼女以外が自分の家の台所に立つところは正直想像しにくい。

でもこれって恋愛感情と言うのだろうか？ 単に託児所の給湯室に立つ菜奈子の姿を見慣れているから、という可能性だつてある。

頭を抱えて苦悶する帝太郎の姿に、菜奈子が吹き出す。

「所長、急に变なこと言わないで下さいね。私、これでも初心なんですよ？ 冗談でもそんな風に言われたらびっくりしちゃうじゃないですか」

菜奈子が笑つてくれたお陰で、場の空気が和んだのを感じる。助かつた……と思うのと同時に自分の不甲斐なさを痛感させられてしまった帝太郎である。

そんな二人の様子を交互に眺めながら玉郎がニヤリと笑つたのだが、誰も気付きはしなかつた。

「美紀ちゃん、お父さんが一週間もお家留守にするんだつたら家にお泊りに来ない？ 実は僕んトコ、男所帯だから色々大変なんだ。あ、もちろん美紀ちゃんのお父さんが許可してくれて……その上美紀ちゃんが僕ん家うちに手伝いに来てもいいって思つてくれたら……の話なんだけど……」

これは、圭吾が規定外の申し出をしに来た翌日に、帝太郎が美紀に対して放つた言葉だ。

今考えてみると、我ながら情けないことを言つたな……なんて思つてしまう。

告げた言葉が、真実と全くかけ離れている事柄だったならばこれほど気にならなかったのかも知れない。

しかし、なまじ核心を突いた内容であったがために、菜奈子たちからかわれる格好のネタとなってしまうのだ。

(……もつと他の言い方すれば良かった……)

さつき玉郎に投げた、苦し紛れの反論にしたってそう。後悔先に立たず。

今更だが、そんな言葉を実感してしまった。

「ま、美紀ちゃん相手ならあれが一番妥当な線だったと思うぜ？」
まだ少しニヤニヤ顔で玉郎が言う。

「そうですね。美紀ちゃんも機嫌良くお泊りを承諾してくれたわけですし……。そう考えるとさすが所長！って感じです。」
取って付けたようによいしょされても嬉しくない。

何やら今日は帝太郎にしてはローテンションである。

いつもなら「えー？ 照れるなあ。やっぱりそう思う？」とか何とか言っていそうなところだが、珍しく黙りこくっているのだから。

「何だかいつもの所長らしくないですよ？ ほら、笑って笑って。」
気を遣ったのか、菜奈子が帝太郎の前でにっこり笑ってみせた。

「あ、うん。そうだね」

周りに心配をかけるのは良くない。菜奈子の気遣いに、いつものように笑い返して見せると、帝太郎は雑巾を持つ手にぎゅっと力を込めた。

「玉ちゃん、はたき済んだら掃除機もよろしくね？」

次の瞬間には、満面の笑みでそう告げていた。

そんな帝太郎の様子に、安堵した面持ちで力を抜いた玉郎であったが、直後、彼が放った言葉の意味を理解したらしくげんなりとした顔をする。

「俺一人過剰労働じゃねえか……」

菜奈子はちよつとした書類整理。帝太郎はちんたらと雑巾がけ。

で、俺ははたきの後にさらに掃除機もかい！？……と言った心境なのだろう。

掃除機をかけるのは一番清掃範囲が広いので不公平に思えてしまうのも無理はない。

「大丈夫、だつて玉ちゃんタフだもん」

ガツクリと肩を落とす玉郎に、そう軽口を叩くと、につこり笑つてみせる帝太郎。

玉郎を苛めるのは楽しい。嫌そうな顔をして反論したりもするけれど、自分が頼んだことは大概何だかんだ言いながらも片してくれる。そんな玉郎に帝太郎は肉体的にも精神的にも救われている。

「さあさ、おしゃべりは程々にしてお掃除、ちゃっちゃと済ませちゃいましょうね」

時計の針は八時を回っていた。

今日はお泊りグッズ持ち込みの都合上、美紀は十分過ぎには来ることになっている。実質、下準備はあと十分ぐらいしか出来ないのだ。

「美紀ちゃん以外の子はみんな九時からでよかったよね？」

帝太郎の記憶しているところによれば、今日は飛び入りの子はいなかったはず。

出窓を拭きながら、振り返り様に菜奈子に尋ねる。

「ええ。後の子は、みんないつも通り九時からです」

単純に保育士と言うより、菜奈子は秘書という位置にいるように思われる。ちゃらんぽらんな帝太郎たちに代わつて、事務的なこと全般を仕切っているからだ。事務という細かい作業において言えば、玉郎も自分と大差ない。普段の言動からも分かるように、大雑把な性格だから帳簿などつけさせてもどんぶり勘定になってしまつて不向きなのだ。

「菜奈ちゃん、いつもいつも秘書みてえなことまでさせちゃってますまねえな」

菜奈子がやってくるまで『つくしんぼクラブ』の事務処理ははっ

きり言って煩雑だった。

仕事をして採算があっているのかいないのか全くもって不明。さすがにこれじゃあ不味いと玉郎に帳簿をつけ始めてもらったけれど三日ともたなかった。玉郎でも無理だったのだ。言うまでもなく帝太郎では話になるはずが――。

実際のところ、十数名という子供に対して見守る側の人数がたったの二人……と少な過ぎたので事務にまで手が回らなかったのも致し方あるまい。

いずれにせよ、一年ぐらい前に菜奈子を雇ってからというもの、そう言ったデスクワーク的な部分が格段向上したのは言うまでもない。

玉郎が菜奈子に投げかけた言葉を聞きながら、そんなことを思う帝太郎。

「苦労なんて……。私、こういうの結構好きなんで逆に楽しませて頂いてるくらいです」

常日頃からの微に入り細を穿った事務処理能力を見ていると決して嘘ではないと分かる。

につこり笑ってそう答える菜奈子を見て、玉郎が心底感心したように目を細めたのもうなずける。

「……ならいいんだけど……」

一時期事務職というものをやってみたからだろうか。玉郎はその時のことを思い出したらしく身震いして肩をすくめて見せた。

そんな二人のやり取りをボンヤリ眺めていたら、はたきを掃除機に持ち替え、早くも次の作業へと移った玉郎から

「帝太郎、お前、いい加減雑巾がけ終えろよな」

すっかりしろよ、という思いがにじみ出てきそうな言葉がかかり、
「はあゝい」

帝太郎はいつも通り間延びした声を返した――。

「それじゃあ二条院先生、美紀を宜しくお願いします」

相沢圭吾が『つくしんぼクラブ』の扉をくぐったのは、八時十五分過ぎだった。

みんなで精を出した——と言うと少々語弊がありそうだが——だけあって、掃除は完璧に終了していた。

少し小ぶりの旅行鞆を抱えた圭吾に、帝太郎がにっこり笑って「お任せ下さい」と告げる。

その言葉に安心したように、圭吾は荷物を美紀の横へ置いた。その振動で手提げのところにぶら下げられた可愛いマスコット人形が揺れる。

「じゃあな、美紀。先生にご迷惑をお掛けするんじゃないぞ？」

娘の前にしゃがみ込んで頭を撫でる。

「心配しないで。パパもお仕事頑張ってね」

そんな父親に、大人びた笑みを返す美紀。

その様を見ていて、帝太郎は少ししんみりした気持ちになる。前から感じていたけれど、美紀の、年の割にしつかりしたところが妹の彩音に重なってしまうのだ。

そう言えば彩音が消息を絶ってしまったのも、確か彼女くらいの年の頃だった。

「それでは——」

名残惜しそうに立ち上がると、圭吾は深々とお辞儀をする。

「お気をつけて」

あんまりにも圭吾が寂しそうな顔をするものだから、帝太郎たち『つくしんぼクラブ』の面々も、やや緊張した面持ちで見送りの言葉を放つ。

（ある種の強制旅行だよな）

去っていく圭吾の後ろ姿を見遣りながら、玉郎が小声でつぶやく。

（そうだね……）

静かにそれに応じると、帝太郎は美紀の荷物を屋内に運ぼうと手を伸ばし、

「いいの！ 自分で運べるから！」

美紀に怒られてしまった。

（何でも自分でやりたい年頃なんですよ）

特に美紀の場合はそうだろう。

きょとんとして立ち尽くす帝太郎に、菜奈子が苦笑しながらそう耳打ちをする。

（大変そうだな、こりゃあ……）

ボソツと呟いたのは玉郎だ。これから一週間も彼女と寝食をともにせねばならないのかと思うといささか不安が募る。

（美紀ちゃんを預かって言ったの、玉ちゃんなんだからね？）

溜め息交じりの玉郎に、帝太郎が追い討ちの一言。言外に、「だから宜しくね」という言葉が含まれているのは言うまでもない。

「さ、今日も一日頑張りましょう！」

そんな玉郎の受難もどく吹く風。

勢い良くガッツポーズをしたのは、可愛らしい顔つきの菜奈子であつた。

夜十時を過ぎた頃になると、『つくしんぼクラブ』の中は、しん

……と静まり返る。子供たちのお迎えが、大抵の場合その時間までには済んでしまうからだ。

「そろそろ閉めようか？」

菜奈子たちに向かってそう問い掛けたのは帝太郎である。

昼間賑やかであるが故に、子供たちが去ってしまった後のこの静けさは何だか堪らなく寂しい。

何年この仕事をやろうとも、これだけには慣れることは出来ないだろう。ましてや今日は、この空気が初心者的美紀が一緒なのだ。

いつもより早い閉めの言葉を発したのは、彼女を気遣つてのこ

るもある。

「そうですね」

それを察して菜奈子も快くうなずいた。

恐らくこうなるであろうことを予測していた菜奈子は、帳簿などの整理を昼間にあらかた済ませていた。

「じゃ、片付けに入るかあ！」

ニヤツと微笑って玉郎が気合を入れる。

エプロンを付けてはいるが、玉郎の場合和装なのでどうしても袂たもとが邪魔になる。家では割烹着かつぽうぎを愛用しているので袂もすっぽりその中に押し込んでしまえるのだが、ここにいる時はエプロンが仕事着のようなものでそういうわけにはいかない。キリン柄の可愛いエプロンも、着物にはお手上げなのだ。

帝太郎のデスクの引き出しから紐を一本取り出すと、玉郎はそれを素早く身体に結びつけた。いわゆるたすき掛けというやつだ。

「玉ちゃん気合入ってるう〜」

その様を見て帝太郎が笑う。

「先生、あたしも何か手伝いたい！」

案の定、美紀も乗り気だ。

二十二時を過ぎているというのに目がパツチリなところを見ると、日頃から夜更かしをしているのだらう。美紀のことだから父親が仕事から戻るまでの間、寝ずに待っているのではなかるうか。

「よし！　じゃあ美紀ちゃんにはごみ拾いを頼もうかな。みんなで協力して早くお家に帰ろうね」

美紀が手伝いを申し出ることは予測がついていた。

につこり笑って美紀にそう告げると、帝太郎も彼女と一緒に至る所に散らかっているごみの撤去作業に取り掛かった。

菜奈子は言うまでもなく、書類整理のまとめだ。

おもちゃの片付けなどという力仕事は玉郎の役目。

四人はてきぱきと自分の役割をこなしていった。

その甲斐あってか、閉めの作業はいつもよりも心持ち早く終わっ

た。

「お疲れ様でしたあゝ！」

帝太郎のこの声と同時に仕事は終了する。

「菜奈ちゃん、バス停まで一緒に行こ」

菜奈子と帝太郎たちの住んでいるアパートは二つばかり町を隔てたところにあつて、バスの路線もちょっと行つた先で別れてしまう。しかし最寄りのバス停は一緒なので帝太郎は彼女がバスに乗り込むところまでは見送るように心掛けている。もしも自分が乗るバスが先に来てしまったとしても一本やり過ぎして菜奈子を見送るぐらいの気は遣つてゐるつもりだ。

本当なら家の前まで送つて行くべきなんだろうが、そうすると却つて菜奈子に気を遣わせてしまうのでやめた。菜奈子が勤め始めて間がない頃、一度だけ家まで送つたことがあるので分かつたのだが、幸い彼女の家はバスを降りるとすぐそこだった。正に家の真ん前にバス停があるという感じ。それで今はこういうスタイルを取つてゐる。

「菜奈子先生と帝太郎先生、おんなじアパートに住んじやえばいいのに」

そつという事情を知らないためか、菜奈子をバス停までしか見送らないと知つて、唇を尖らせて抗議する美紀。

レディに一人で夜の道を歩かせるなんて信じられない！

そつ言つて頬をふくらませた美紀に、帝太郎と玉郎が思わず顔を見合わせて苦笑する。

コートにマフラー、耳あて……それから大きな荷物。防寒のためにやや着膨れた感のある美紀だが、そついうあどけなさが残る面差しと、妙にませた感じのする言動のギャップが愛らしい。

こつしてただ立つてゐると、凜然たる寒さが骨身に沁みる。

帝太郎はセーターの上に着込んだコートの襟を立てると、手に息を吐きかけたりこすり合わせたりといった仕草を繰り返した。

玉郎は長着^{ながぎ}に羽織姿という風情である。いつも暑さ、寒さについてあまり触れないところを見ると、割と気温の変化に疎いらしい。普段は帝太郎の希望で長着姿だが、玉郎自身は平安貴族然とした束帯姿のほうがり落ち着くようだ。休日などは好んでそういう格好をしているところからもそれが伺える。帝太郎としてはＴシャツにジーンズなんていう今時の着こなしを身に着けて欲しいのだが、それはまだまだ先の話になりそうだ。

菜奈子はというと、ふわつとした印象の緩めに編まれたセーターに身を包み、その下にジーンズをはいて白のハーフコートを羽織っている。先程美紀に爆弾発言をされて以来、吐く息は白いが寒さを忘れてしまったようにぼおっと突っ立ったまんまだ。どこことなく潤んでいるような印象を受ける瞳と、両頬が熱を帯びたように桜色に染まっている様は、何となく艶めいた印象を与える。耳が赤くなっているのは、何も寒さのせいばかりではあるまい。

（帝太郎、今日は菜奈ちゃん送って行け。こっちのレディにや俺がついてるから）

菜奈子の様子に気付いた玉郎が、帝太郎に小声でそう耳打ちすると、菜奈子が「そんな申し訳ないですっ」と眉根を寄せる。

（……でもそうしなきゃ美紀ちゃん納得してくれそうにないよ？）
こちらは彼女の様子に気付いていないからこそ言えたのかも知れない帝太郎のセリフである。鈍感もここまでくるといっそ快い。

菜奈子の口の前に人差し指をあてがう仕草をしてそれ以上の言葉を制すると、帝太郎は玉郎にうなずいて見せた。

「じゃ、玉ちゃん、これ」

美紀がいるので今日は玉郎もそのままの姿でバスに乗ってもらうつもりだった。コートのポケットから財布を取り出すと、帝太郎はいつも愛用しているバスカードを抜き取って残りを玉郎に手渡す。

「お前、金、一銭も持つてなくて平気なのか？」

「僕はこれがあれば大丈夫だから」

バスカードの残度数はまだまだ余裕がある。途中で買い物する予

定もないし、とりあえずは平気。

「……それにね、夕飯の材料とかで足りないものがあつたら途中で買つて帰つてもらいたいし」

家事全般を取り仕切っているのは玉郎なので、そういう点から考えても財布は預かつてもらうほうが好都合。

寒い夜に出たり入ったりするのはどうも気が進まないから。

「了解」

手にしたカードをひらひらと振りながらそう告げる帝太郎に、玉郎がうなずいてみせた、ちょうどその時――。玉郎たちが乗る路線のバスが来た。

「帝太郎先生、送り狼になっちゃダメよ？」

バスに乗り込む直前、思い出したように帝太郎にそう告げる美紀。大きくて凜とした瞳が、真っ直ぐ帝太郎を見据える。

美紀からの手痛い指摘を受けて、苦笑する帝太郎。菜奈子はその背後で小さくなってしまった。

そんな美紀の後に続いてバスへと乗り込む玉郎に、どこか継^{すが}るような視線を投げかける菜奈子。

帝太郎と二人きりになったっていつもなら緊張などするはずもない菜奈子だが、今日は何だか色々ありすぎて、ちよつとどぎまぎしている様子だ。

その様を確認して玉郎がニヤリと笑う。

玉郎の、どこか含みの感じられる笑みを見て助けはないと分かった菜奈子が所在^{ふしめ}なげに頭^{うづ}を垂れた。

うつむいて伏^{ふしめ}目がちになった菜奈子の長いまつげが、バスの車内から漏れる照明に照らされて目元に影を落とす様はなかなか艶^{あで}な感じだ。

そんな菜奈子の雰囲気^{ふしめ}に気付いているのかいないのか。のほほんとして手を振る帝太郎に、溜め息の玉郎である。帝太郎のことだから送り狼になるということは決してあるまいが、それと同じくらい好い雰囲気になる可能性も低いのかも知れない。

二十二時を回っていることもあって、バスは空いていた。大きな荷物を抱えてえっちらおっちら歩く美紀が一緒だったので、玉郎は正直 安堵した。あんど

「玉郎先生、美紀ね、お味噌汁してくれるよ?」

美紀の希望で一番後ろの席に陣取り、ホッと一息ついたと同時にそう言つて顔を覗き込まれ、玉郎はちよつと驚いてしまう。

一瞬の間の後、美紀が言外に味噌汁を作らせて欲しいと言っているのだと理解する。

「よっしゃ! じゃあ、夕飯の一品は味噌汁にしよう。具は何にすつか?」

「玉ねぎ!」

子供にしては珍しい具材を言う。

確か玉ねぎなら、まだ五、六個ベランダに吊るしてあつたはず。

大豆、大豆してしまうかもしれないが、冷蔵庫にはおからも入っていたはずだ。ニンジンや鶏肉なんかもあつたはずだから、おからの炒り煮なんて作るのも悪くない。

田舎育ちのためか、帝太郎はそういう昔ながらのお袋の味を好む傾向がある。それで自然、メニューがおばんざい系になることが多い。子供である美紀が果たしてこういうおかずを好んで食べてくれるだろうか?

ふとそう思い至り「おから、好きか?」と問うと「大好き!」と返った。

「パパが好きでね、よくお惣菜屋さんで買つて来るの!」

それで食べ慣れているのだと美紀は笑う。

「あたしがもう少しおっきくなったらね、つくり方ちゃんとおぼえて……買わなくてもいいようにしてあげるの!」

そこでふと気付いたように玉郎を見つめてから

「玉郎先生、おからつくれる?」

そう尋ねて小首を傾げた。かし

美紀が言う“おから”とはおからの炒り煮のことだろう。

「当然！」

ぽんつと胸を叩く玉郎に、美紀の顔がぱあっと明るくなる。

「玉郎先生、おからのつくり方、おしえてくれる？」

「お安い御用だ」

「ほんとう！？ やったあ！ 今日のあたし、すつごくついでる！」

たかだかおからの作り方をレクチャーしてやる……と言っただけなのに美紀のはしやぎ様がやけに大袈裟おおげさに思えてしまった玉郎である。

「……？」

思わずきょとした顔で美紀を見つめると、

「だってね、ごはんの先生見つけられたし、それにね内緒だけど、さつきお掃除しててすごくキレイなものも見つけちゃったんだもん」

「」

美紀の言う綺麗なものは一体何のことだろう？

ふとそんなことを思っただけ彼女を見遣ると、嬉しそうに微笑みながら両足をブラブラさせている。片手がスカートのポケットをぎゅっと握っているところを見ると、宝物はそこに入っているのだろう。

大人っぽい言動の間に見え隠れする、年相応の女の子の姿。

そんな美紀を見ながら、大人になったら絵に描いたような良妻賢母ぶりを発揮するんだろうな、と玉郎はぼんやり思った。

「ただいまあゝ」

アパートに帰り着いてドアを開けると、ほんのりと甘い味噌の香が鼻孔をくすぐる。

菜奈子を家に送り届けた辺りからちらつき始めた雪。その中を歩いて冷えきってしまった身体に、温かい汁物は有難い。

「お帰り。お疲れさん」

帝太郎の帰宅を察して味噌汁の入った鍋に火を入れながら玉郎がねぎらいの声をかける。

「美紀ちゃんは？」

「お前が帰るまでは……って頑張ってたんだがな……」

玉郎の視線を追って部屋の奥へと目を向けると、端に追いやられたこたつの横に布団が敷いてあるのが見えた。

「やっぱりしっかりしてるように見えても子供だね」

あどけない寝顔を見つめながら帝太郎が微笑む。

「まあな」

恋愛に関して言うならば、お前よりは彼女のほうがよっぽど卓越してると思うがな、という言葉を読み込む玉郎。

「先に飯にするだろ？」

風呂も沸かしておいたが、せっかく温めたのだ。食事を先にしてくれるほうが台所も早く片付いて助かる。

「うん、有難う。実はお腹ぺこぺこなんだ」

コートをハンガーに掛けながら帝太郎が舌を出して見せる。

そうしながら思い出したようにコートのポケットに手を突っ込んで中を探ってみたが、左右どちらにも何も入っていなかった。次いでズボンのポケットを叩いてみて、その一つに小さな異物が納まっているのを確認する。

「無垢玉の所在確認たあ、感心、感心」

帝太郎のその仕草を見遣って玉郎がニヤリと微笑う。

帝太郎、実は玉封師という仕事柄、いついかなる時に真つさらな封じの玉が必要になるか分からないので、玉郎のものとは別に何も封じていない玉——無垢玉——を一つ二つ、ポケットなどに忍ばせることを常としている。

しかし、のほほんとした性格なので、よくそれを不用意に落つこととしては玉郎に叱られてしまうのだ。

今日は美紀がいるので少し気を引き締めたらしい。

（今朝は何個持って出たんだっけ……）

無垢玉の所在確認はしてみたものの、その辺が曖昧では意味がない気がする。

声に出せば当然玉郎に怒られてしまうので心の中でぼんやりとつぶやいてから、

（まあ、一つはズボンのポケットに入っているし、問題はないかな）
隅に追いやられたこたつに遠慮がちにそつと潜り込みながら、そういう結論に達する。

恐らく先程まで美紀が暖を取っていたのだろう。こたつは火が入ったままだったらしく、ほこほこと温かい。

封じの鬼が入っている玉なら大問題だが、無垢玉ならただのビー玉と大差ないので落としたってさして支障はあるまい。玉郎には言えないが、帝太郎はそんな風に思っている。

「……ん」

極力静かに行動したつもりだったが、間近に感じた人の気配に、美紀が目覚ます。

「あれ……？ あたし……」

目をこすりながら起き上がると、玉郎と帝太郎とを交互に見やつた。

「帝太郎先生、いつの間に？」

「今帰ったトコだよ」

「ごめんなさい。あたし、起きて待ってるつもりだったのに……」

この子はいつでもこんな風に眠い目をこすりながら父親の帰りを待っているのだろう。

申し訳なさそうに頭（うづ）を垂れる美紀を見てみると、容易に想像がつく。

「気にしないでいいよ。美紀ちゃん、今日は沢山お手伝いしてくれたんだもの」

「おかずも作ってくれたしな？」

湯気のくゆる盆を手に、玉郎がニツと笑ってウインクをする。

「そうなの？」

「ああ！」

味噌汁作りの時もおから作りの時も、美紀は本当によく手伝ってくれたのだと玉郎が太鼓判を押す。

あんまり手放しに褒められたからか、美紀がくすぐったそうに首をすくめて頬を染めた。その姿が何とも愛らしくて、自然と笑みのこぼれてしまう帝太郎。

「玉郎先生、あたし、お茶碗運ぶ！」

照れくささに居たたまれなくなったのか、そう言って台所へと駆け出す美紀。

「茶碗はその棚んな」

言いながら玉郎は熱々の味噌汁がよそってある汁椀を三つこたつの上に並べると、それとは別に真ん中に大きな鉢を置く。中にはこれでもかと言わんばかりの量のおから。

「玉ちゃんたちもご飯まだなの？」

「お前が帰って来るまで食わねえってごねられちまって……」

何とも美紀らしい。苦笑しながらそう告げる玉郎に、帝太郎も微笑み返す。

「素敵な奥さんになるだろうね」

帝太郎が、玉郎が思ったのと全く同じ感想を述べた時、茶碗と箸を手にした美紀が戻って来た。

「菜奈子先生のこと？」

まさか自分のことを話しているのだとは露ほども思っていないの
だろう。

きょんとした顔でそう問いかけると帝太郎の顔を覗き込んだ。

「いや、菜奈ちゃんのことじゃなくて」

「まさかべつの女の人の人はなし？ 帝太郎先生、浮気はダメよ！？」
ますます話がややこしくなる。

「そいつ、美紀ちゃんのこと言ってたんだぜ？」

黙って見ているのも面白いかも知れないが、それで食事が冷めて
しまうのも面白くない。

そう判断したのか、珍しく助け舟を出してくれた玉郎に、帝太郎
がホッと安堵あんどの溜め息をつく。

「あたし？」

「そう」

またもや褒め攻撃にあつてしまい、ドギマギしてしまう美紀。

そのぎこちなさを払拭ふっしょくするように

「炊飯器、重いから持ってきてないの」

そう告げて台所を振り返ってみせる。

「ああ、ありや、熱くて危ねえから俺が持って来るよ」

美紀の視線を受けて玉郎が台所へ向かう。その後を追うように美
紀もついて行ってしまった。

それを横目に見ながらふと美紀が眠っていた布団の上に視線を移
す帝太郎。そこで気付いた。

「これは……」

——マズイ！

こんなのを落つことしているのを玉郎に見つけられたら、きっと
小言の種になる。

そう懸念した帝太郎はさつと手を伸ばして布団上に鎮座ちんざしたそれ
を手に取ると、気付かれないようこっそり胸前の巾着に仕舞い込
だ。

「美紀ちゃん、腹、減っただろう？」

小さな子が、こんなに遅くまで何も食べずに頑張っていたのだから。

台所とこたつの間を嬉しそうに行ったり来たりする美紀に、玉郎が問いかける。

「……うん。少し……」

自分が作った料理を帝太郎がどんな反応をして食べてくれるのか見届けたくて、一人で先に食べることを頑かたなに拒否した美紀だったが、正直なところ先程からお腹がグーグー鳴りっぱなしなのだ。その音を玉郎に聞かれてしまったような気がして赤面してしまう。

「よっしゃ。じゃ、特別にデザート付けような。冷蔵庫の中にプリンがあつたはずだからそれ食っていいぞ」

「えっ！？ でもそれ僕の……っ」

玉郎の言葉に大人気なく反応してしまった帝太郎。しまったという風に苦笑して「……だったけど働きの美紀ちゃんにあげちゃいます」と付け足して冷蔵庫を指差す。

「ありがとう！」

屈託なく微笑み返す美紀を見て、玉郎も帝太郎も何だか幸せな気持ちになる。

二人だけで家にいるとこんな和やかな空気は流れない気がする。

家に女の子がいるというのはこんな感じなんだろうか。

ふとそこで菜奈子を思い浮かべてしまって、帝太郎は苦笑する。

今日はどうもおかしい。

美紀がおませさんだから菜奈子と重なってしまったのか、それとも菜奈子が童顔だから美紀とイメージがダブってしまうのか。

本当の理由はそれだけではないのだが、恋愛感情に鈍い帝太郎はそれに気付けない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2925b/>

玉封師-Gyoku-fu-shi-

2010年10月8日14時10分発行